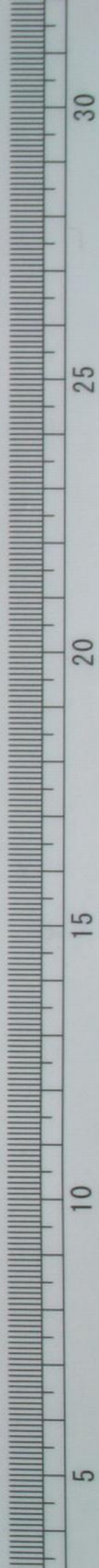


甲戌瑣錄

昭和九年第五月上浣起筆

四

特別
14
1919
459





少剣三反
長々

176724

甲戌談録

昭和九年五月上院起筆

○書畫の藝が本位であるから、誰れが書いし何人の揮
毫に成つても、よく書かんとせんか、賞讃に値する。此ら
極端を云ふは、與落致か、よひ苦むある。全然筆
者の誰んか、そのを測るるん、そのいやくも、そのある
か、事々際い誰んか、書かん、そのことを知ることが大切と云
てある。尤も書畫の筆者の氣格の現いん、あるから、
筆者を知ることか、必も要である。こゝに、筆を書畫を
賞讃する、その思ふが、筆者の、閱歴を、秋毫查する、こ
とが、通例である。筆者が、書壇や、画界の、才一人者、ある

白と紅の二、賞歎の熱が一層加つてしまふ、動もするも葉
者も重きを置かず不相慮の價値のけつやうなこともあるが
實に紙の本位に於ては、其の長短のより品勝すべきで、筆者
の如何の二の次にすべきである。

併し書畫の程に極り、筆者の進んたるが本位に其の
作りの次位にあるよがある。このより専門家の如き
の筆者に書かんと書畫部類に謂ふ素人書畫がある
。此部類の書畫は藝に未熟の七別を云ふ●味があつた
其の味の専門家の有らざるの味に、或る賞歎に値する
例へば待人の就て云ふと、専門詩家と非専門詩家と
がある。日本の近世に専門詩家と云はる人々の法念
茶山星峯棟南等の如くあるが、山陽の如く非詩者

標高

門詩家と云ふは、その詩家の作の措字や調子が
よく調ひてあつたが、山陽の非詩人であつたが、其の
作品の決して幾如きよべきに過ぎない。自家の胸臆を述べ
る詩人の企及し得ることと言ふ所、幾歎賞もさ
べき價値がある。山陽の詩人の其の人格をさうけ出し
たこと、その如く、その詩を後人にも人をしと血沸き肉躍
の概ありしと云ふ、詩が専門詩家の作と異つて流き
あつたが、山陽の書も決してその書家の書に比する
卷菱湖が山陽の書と云へば、其の一般の愛好を傳する所から
見て、甚だまづかきことであるからである。書家

の書の熟して長き相違なきが往々逆氣が持つて人をして弊弊
威遠せしめる此點からまよと非専門家の書畫より寧
ろ拙まへきぬがあるまゝに氣を達してあるのむいなる
いか、筆者の人格があつてこそ、非専門家の書畫より寧ろ
けいんとぬを感するよめ、非専門家の書畫より寧ろ
次位に筆者の氣格が寧ろ主位に入ると云ふ所以と
いふはなる。

凡人格と書畫鑑賞の中心とする時近々、鴻業を
成し切臣の筆蹟を鑑賞するを興味の饒かるる
ものあつたさい、此等のもく、幕末の生れて一時の風潮
に乗じて、北流の間に活躍して畫期的大業を挙げ
人々の心の歴史に大なる足跡を残してある。彼等の



個性の彼等が居るに當り依つて冬も異つてゐるが、其
の氣魄の威張りがあつたこと、皆同一に、大人物が多く、
これのも、世を圓が人材が満ちたこと、恐らく空前であつ
た。此等の人の、概ね歴史中の人ととりて、其邊り墨を
使う人も、人も信ぶ外にないが、何人七人の遺墨に對
し、能く敬虔の情を抱く、情を抱くといふ感交り起る、轉
じ敬虔の情を抱くことのある、若くは、墨蹟の
あつ得るの趣味があつて、雖令其遺墨が拙があつ
ても、其の筆勢が氣魄の現る人々を感動せしむ
るものがある、而して况んや其の筆蹟の多き、決して
拙い、斯く、斯く敬重すべき「張」の、
維新運動の墨蹟を鑑賞する時、何人七人の氣の

つくは、其人の属する藩の風のことか、口流の事か
である。薩長、中津藩の風は、長らく長風の風か
土肥田の土肥の特徴がある、亦、その他に於て七角
の難き流風の事か、ことを否み得る。これを吟味す
ること、受る風味がある。全体幕末の雄藩の諸
侯も、才学の人が多く、其の筆蹟の優劣、
るに、烈公より、柳前、春嶽、土佐、容重、
るに、洲本、あつたやうに、其の流風の、
者の筆蹟、一脈の通する、あつた、
るに、西卿、あつた、大久保、あつた、
あつた、山崎、あつた、土佐、あつた、
るに、東湖、あつた。此等の筆蹟、
別と



して、後世に傳へて、決して恥かしく、
ま、と、筆蹟の品性、其人の住地から生ずる、
格、半井、其の、
日書、
未、土佐、
容重、
るに、
か、
先、
元、
七、

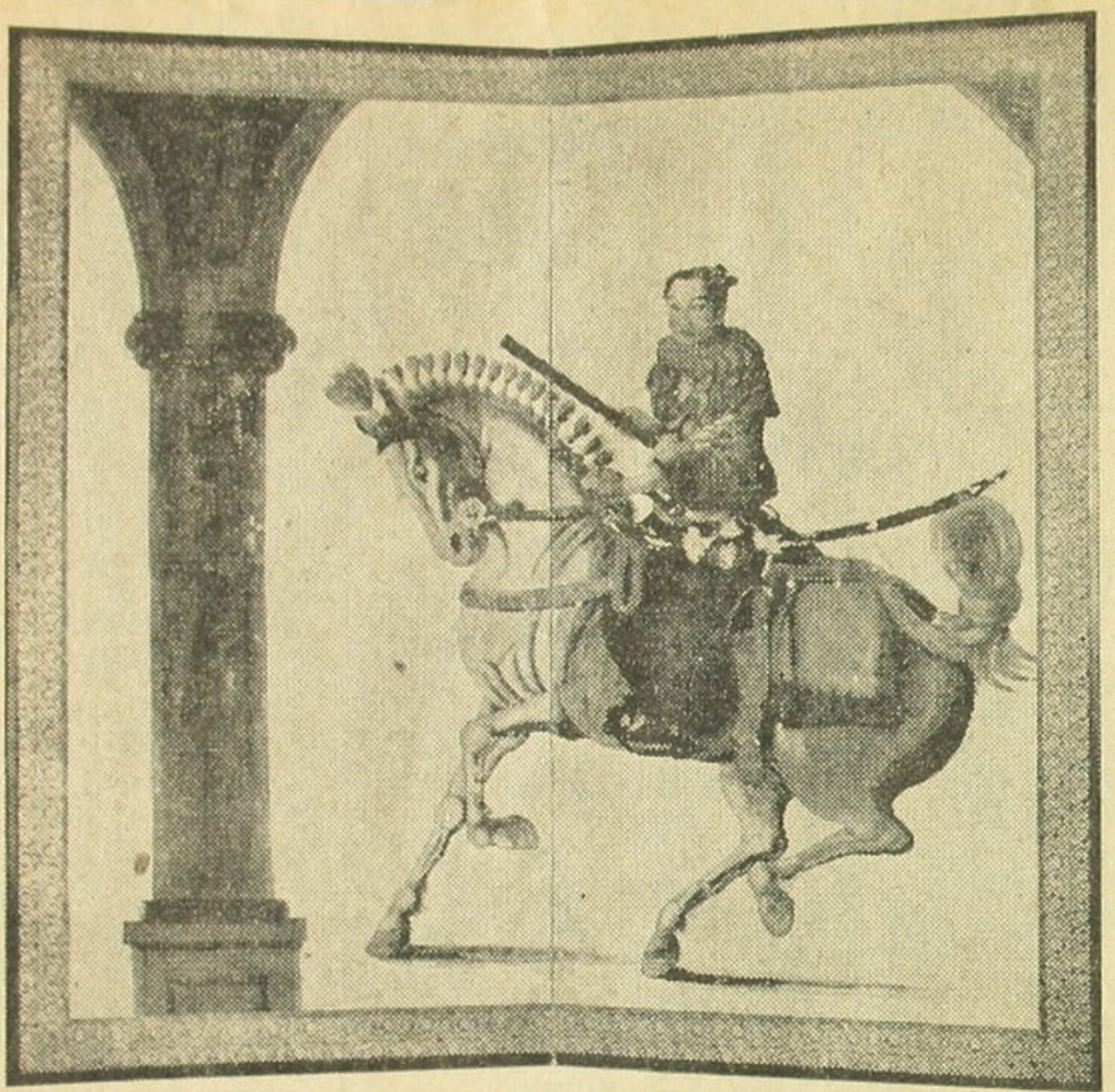
天正遣歐使節

『祐益』の畫像を發見

金屏風を彩る名家の筆

切支丹研究に貴重な資料

耶蘇會の活躍時代、大友宗麟が大村純忠、有馬晴信二侯と共に使節伊東祐益(近來「贋買」は誤りで「祐益」が本當だといはれてゐる)をローマ法王廳に遣はしたことは史上有名な話で、祐益がグレゴリー十三世から託された豪華な聖典が佐藤書齋博士の元に贈進され、この聖典に出たことは歴々の通りであるが、不思議なことには、今度は從來全く世になかつた祐益の畫像が、數日前、ギリシヤン研究家水見徳太郎氏によつて發見された。それは二枚折の大さな金屏風にアラビアの白馬に跨がる紅顔の美少年を描いたもので、色彩と彫刻から京の名ある畫家の筆になつたものと見られ、少年の衣服に大友宗麟が贈進した聖典につた桐の紋と伊東家の定紋「十隴」が散らされてゐる點、西洋布で



發見された『祐益』の畫像

東祐益の像に相違ない」としてゐる。もし氏のいふ通りのものでしれば、全く珍しいもので、十字架のあるロマネスク圓柱の間を通過する様子から見て、伊東祐益がローマ市民の歡迎に法王廳に謁々と乗り込むところを現してをり、

宿望を達し

喜に堪へぬ

發見者 永見氏談

天下の絶品

長野草風氏談

今まで見た南蠻ものうち第一に指を折る絶品である。京都の豐國神社の寶物である秀吉の羽織のへりに黄色の南蠻布があるが、これがこの袴の模様と同じとされてゐる。

濱田耕作博士の著「天正遣歐使節記」によると現存する使節の肖像は「法王シスト五世ラテラノ寺御幸圖」オリンピヤ劇場畫「日本からの新聞といふ本版畫」の三つで、どれも幅が小さくない、外人の描いたもので明瞭でない、私は永年、南蠻美術を研究してゐるが、どうしてもこの少年使節の圖が見つからなかつた。濱田博士なども残念がつてをられた際、ヒョッコリ某家に妙な屏風があると傳聞してこれを發見した。多年の宿望を達したわけで喜びに堪へない、時代は文祿か、おそくも慶長初期で畫家は祐益の風采に接した者であらう。

多少の疑問

幸田成友博士談

實物を見てゐないので、はつきりしたことはいへないが、大したものらしい、不思議なものが出たものだ、想像圖はあるがこれが想像圖でないとしたら全くえらゐものだ、しかし肝腎の紋所は果して祐益の紋か、馬のたてかみの結び方は日本風ではないか、かういふ事は當時果して日本に無かつたか、騙はす持物は私にはなほ疑問があり、それらの専門家に見てもはねば

◆レインコートに對するTK氏、弁明させて戴きたいと思ひます。殊に春先などは天気が變きで雨に逢つて困ることは、よく勿論私達も「貴客の下に白茶して」「伊達姿」だなどさうくではありませんが、出来ること、リングコートを、春風に纏へして着ますが、俄雨に逢つたら片主

○此内閣行をせしむれば、此の逸筆、流のるも、旅伝、よ
り、名、好、を、雷、の、ま、よ、お、つ、ぎ、毎、の、一、句、を、書、す、事、に、こ、こ
か、日、保、の、ま、よ、ま、よ、書、き、数、く、此、よ、か、少、く、ま、よ、ま、よ、
凡、社、の、旅、伝、書、流、に、一、の、名、義、漫、漫、法、を、書、き、更、に、又、維
新、元、初、の、墨、蹟、と、就、ち、を、書、す、旅、伝、心、境、ま、よ、不、思、の
池、畔、を、御、洋、に、と、書、き、也、四、氏、以、の、の、書、に、交、り、し、
考、の、情、境、一、句、を、書、つ、つ、政、界、性、来、ま、眼、の、一、句、
を、投、す、ま、よ、和、の、ま、よ、の、書、の、逸、筆、を、就、ち、
此、一、句、を、ま、よ、一、句、人、ま、よ、一、句、に、交、り、し、
り、頼、ま、ん、と、果、さ、ま、よ、一、句、か、ま、よ、一、句、に、交、り、し、
書、い、れ、た、利、某、が、流、ひ、ま、よ、一、句、の、情、境、を、書、き、せ、れ、か、
後、ん、か、え、れ、初、め、と、此、人、の、ま、よ、一、句、を、書、き、せ、れ、か、
後、ん、か、え、れ、初、め、と、此、人、の、ま、よ、一、句、を、書、き、せ、れ、か、



を、わ、け、と、喉、を、ん、書、き、流、に、三、句、い、て、書、き、也、山、陽、の、墨、
蹟、の、逸、筆、を、流、に、就、ち、と、書、き、也、此、の、子、三、四、句、が、
山、陽、の、逸、筆、と、思、ひ、つ、つ、の、を、見、れ、た、眼、福、の、ま、よ、
こ、の、情、境、ま、よ、井、島、沙、の、ま、よ、金、巻、紙、の、ま、よ、
詩、を、就、ち、と、思、ひ、つ、つ、の、を、見、れ、た、眼、福、の、ま、よ、
ん、か、ま、よ、一、句、を、書、き、也、一、句、を、書、き、也、一、句、を、書、き、也、
後、接、ち、ま、よ、一、句、を、書、き、也、一、句、を、書、き、也、一、句、を、書、き、也、
ん、四、句、を、書、き、也、一、句、を、書、き、也、一、句、を、書、き、也、一、句、を、書、き、也、
其、数、ハ、る、故、然、と、数、く、大、阪、列、島、一、句、を、書、き、也、
又、ま、よ、二、時、間、を、書、き、也、一、句、を、書、き、也、一、句、を、書、き、也、
其、の、心、を、流、に、と、え、れ、と、也、旅、伝、合、道、一、句、を、書、き、也、

○此夜全圖の國者燄火
今も出座しし各比の國
書師長等甲名群許
り目里の難叙國々今も、此別を無
ハ支那料理現かまじ日本料理や、山
吹大連梁を尋らんは、こゝへ今も
ものが多し。十連連梁が評判とるを
あつらふと思ひ、あつらふも大連の連扱
坐あつた敷も多し廊の長と一町不
いもあつた大連あつたの昔師ハ古とア
ロテスクるも、甲名のは流と座す
ふとあつた、甲名古の今も、今も

乙亥と凡そ五六十冊の大室が、床柱は徑二尺五寸
 くと覚しき檜の丸柱に人物彫刻あり、襖障子の
 上段も東海道五十三次と細刻あり、白木の板
 じ繞らし、襖のへりや床のつちるゝ螺鈿を俵し
 襖も極彩色の繪あり、西の柱に一切撫ありし
 床に揚げある大拍額あり、そのまは皆桂舟の書畫
 あり、厠も水つてるも、櫓ぐべし、敷板は墨の漆塗
 りも全泥を以つて、井を画しあり、豪華平目をも
 あり、はぢり、グロテスクの意味あり、も俵衆をも
 着し、のそけい地をもあり、か、造人金をのけり建
 設あり、看取せんぬ。

五月十日記

○吉江春松と記せんぬ、モーパッサンの舟の上を讀んぬ
 吉江春松と記せんぬ、モーパッサンの舟の上を讀んぬ



元元。モーパッサンを千八百九十三年に死んだ人が、此
 の著しい死前六年に出来たもの、此頃はいくらゐ
 夫れ狂氣味びあつたと留んぬもの。世の事いふ、面
 白くも、と、こゝに氣を休めた船に乗つて地中海に
 出た、四つに、此の舟の上の、其の執事書いゝか、
 七日、善も、此に行といふ、吾に異つて、物と觸れて見
 くの所感が深刻、書のおも、多、多、多、多、多、多、
 志、音、群、集、心、理、お、獨、の、鑑、又、身、の、流、衣、に、名、文
 目、多、多、い、か、ど、こ、か、狂、氣、ト、み、地、高、か、多、い、ひ、も、多、い、心
 ち、つ、て、ま、た、目、を、あ、ひ、ひ、の、筆、段、か、あ、る、此、又、喜
 八、自、ら、咽、喉、を、切、つ、て、自、殺、せ、ん、と、い、ふ、か、た、は、
 か、ま、し、其、為、め、死、ん、ぬ、人、い、あ、る、文、豪、と、い、ふ、よ、う、

いまでもおぼろげにあらはれ、こりも、ハサコのみこ、就し怪
あふさびて買ふ、左、野、橋、海、と、他、の、各、致、し
渡、り、し、り

私、歌、う、と、い、ふ、こ、ろ、は、を、考、へ、た、は、な、い、や、ま、完、分、も、妖、術、の、い
と、異、端、の、化、則、し、つ、ら、と、ま、さ、る、何、れ、と、さ、い、し、し、終、つ、と、ま
つ、れ、思、い、い、異、形、の、反、自、然、的、な、多、才、な、つ、い、と、活、つ、と
い、ま、う、や、う、よ、一、存、の、ど、つ、し、ま、や、う、と、感、じ、と、身、を、先
（ふ）

彼、家、と、走、り、廻、つ、も、ろ、ろ、小、さ、な、身、の、隊、列、の、尾、尾、後、者、が
跡、上、を、駆、つ、ま、つ、と、獸、群、の、や、う、に、死、に、向、け、い、ん、と、る、終
等、の、平、空、の、中、に、倒、れ、た、あ、ら、う、と、野、を、知、覚、し、打、割、ら、ん
胸、を、鋭、に、貫、つ、た、ん、と、い、か、も、ま、ん、の、倒、れ、生、存、し、有、何
い、ま、う、得、る、若、者、共、の、あ、ら、う、と、彼、等、の、父、親、の、年、老、の、死、
い、彼、等、の、身、に、お、か、な、廿、年、間、彼、お、と、ま、る、と、有、り、と、母、親

入見、我々の野を祖光の好血観念の、重なるの下に生
きてゐる。其の我々の執着は甚だ。我々の本能も支配せ
る。何れも変化してしまふ。執着しては居る。居る。居る。

斯道の執着は甚だ。天才的殺戮者それトケ持守り
一日、媼と妻と又等し、次の如き言の異る言辭の意
を以て。

「執着する聖なるもの、神性制らむるもの、この世界の根
聖なる法則の一つである。執着する人間のするべき有る
偉大なる、高貴なる、情儀を保持する。即ち不変無
私有徳、勇気あることをしむる。是にてあるべし。是

等が亦も思ふべき執着主義、墮することを行く
のみである。

わたくし四十歳の群団の徒を以て、日夜休むれども
何れもかたがた定むる。何れも定むる。何れも定むる。何れ
の徒も主なる、汚穢なきもの、泥沼の中を以て、不
の神性塵埃執着の執着の如く生流し、都市を
奪略し、村々を焼く。人々と殺す。導きよむる。人
肉の集団を打ちつて、是れ、血の池を、血泥
こまゝの搦も砕かぬ。肉の原野を、死屍の堆積を
つくり出し、千足をもぎとらん。何れのためか。何れ
に服従を許さん。何れのためか。何れのためか。何れ
一きふ。その時彼の年をいれむ。彼の時、何れの子

供等ハ飢餓ハ死ぬ。こんなことをハ、所々忘るべき持質主義
に墮せると人の呼ぶところのよめあふ。

何れに清政府の宣稱布告と一に毎に批判せんと
かくうかき、善し民衆がよき善を理あるべし。若し
彼等が自身殺入カ、制裁を加へんべし。若し彼等が
いはんぞ殺せんとすることを拒むるべし。若し彼等が自
分等の武器を殺戮の道具に用ひば、善し彼等と異つて
あるべきも使用に用ひば、善し彼等と異つてあるべし。
つてあつて、けんい多入を日に来るべし。あつて



ケエヌターワインド船ハ一千七百年より千二千紙
を定りせしや、人々の大衆國の中へは、いつと心の流
動性が俄かに失つて仕あることとをあらわす。又、
教員の命令、鳥令の集團、あつて、善し彼等と異つて
かめつて、人々のあつて、善し彼等と異つて、
を用ひて、善し彼等と異つて、善し彼等と異つて、
の感定彼等のあつて、善し彼等と異つて、善し彼等と異つて、
あつて、個々の人の一の集團、あつて、善し彼等と異つて、
あつて、

以上ハ代成政体ニ對するニ、重要重大なる駁論の一例を擧げ
しとある、モウハヤンと云ふ。

多うくとき現象が多数の人々の集るべき毎に望む
る。統てん等の人々の一人一人比すると互にはつきり異つて
ある。心も記憶も情熱も、教育も、信仰も、僻見も異なる異つ
ておる。単に集合せしめればといふ一事だけでは
思つてえんらの個々の意見を平均して分析し難や
うな合成物とする。新しい共通の考へ方を賦與せよ、
一個の意見自身の形跡を異つてん特殊な生存を
指成してしめよ。

こんが羣集である。それこそ群集が或一人格である。
えんが一大集人ひらつて、一個の人が他の人とはつきり異
つて居るやうに、他の集團とはつきり異つてゐるの
ことである。



但し「羣集の推定を」といつてゐる。それ何故羣集
は、多中にある自の特殊な個々の推定するを推
定しよといふか。何故羣集の、その中の人か一人
一人をいふ何人かかと思ふことも、自覺的
なやのいふか。何れも羣集の抗難い衝動や、
権威を去るや、何物か押へる事の出来さう、思ひ
い誘引を持つてゐる。それとえんらの思ひの
誘引を駆逐してえんを復讐する個々人が一人き
りゝゝ何人かか。行為を為しと仰るが

.....

市宜「即ち、彼が羣集の一部とさせられんが為め

もう一回の人間の心をもつたことである。彼の個人の志を
二滴の油が火へ流しつゞと燃やさん共道志者の中へ混
せんとするのと似ていふことである。

彼の人格は清く正しく、一つの度大なる不思議な
人格の、摩訶集の人格の、一介微分子と云つては、その
甲冑を脱ぎおぼ怖の怖ハ全國民を驚かすまで、
のどろの狂氣にも死人の舞臺にもなること全く因
に現象の著しい例証である。

もうパサンは又左の如く云つてゐる。

私は世を行ける。また世に一般の世を歩くも出
しんない。私の世を歩く行けるは、一往奇ぬる耐く
んないおぼなる感にも味は、非任の意弱まはす

ふむりうの如くも、任職する下は私の全力を
して、おぼなる思慮を抗難の力と云つては、やがて
もして世を歩く私の心の中心へ、
集の精神と云つては、
式がとく、私の心も、人か一人きり、
現物が、おぼなる、
か、また他人と云つては、
佳くするといふこと、
空を飛ぶ、
とや、
はさて、
星潮の干満が、

野へ、家か、家か、街か、

彼等以上何猶が長きにあり、愛されざるを
い、友情ひか、愛情ひか、死に備いつまむか愛さず
可いものなり。そと、彼が口にし、誓ひ、感涙
し、自分等の全心を、以て死に付くもの、或る如く
多し人の心に注ぎかけ、不問出逢つても、その顔が
氣に入れば、其の現に自分等の全心を注ぎ込
かうしに惶し、死をかく、教の誤解や、其の
ことや、さしや、そと、人生、別れを来す。
かくて我々の心、いかに好むを、やはり我々の、
あつと、同じく、いかに好むを、あつと、我々の
やはり、自由である。

○待谷極楽の私生活と乳このんま、いかに、金銀



鑑別と事をも、古め、美福、於、集古、書と
なると、和をえ、愛を、知り、得ん、存、揚、給、す

待谷極楽、保稱、津、行、屋、三、五、工、の、と、は、其、舊、を、
飛、の、神、は、電、車、を、上、り、右、側、を、津、
行、家、に、米、穀、江、戸、に、運、送、の、か、い、志、く、津、
行、の、手、を、行、は、後、の、倉、積、み、し、又、押、出、す、
一、徳、の、し、一、計、の、計、手、敷、を、し、か、は、い、と、
み、こ、未、え、さ、う、徳、あ、さ、あ、り、を、根、高、を、し、
津、行、家、に、手、あ、り、し、津、行、屋、を、花、吉、女、
他、の、物、を、法、印、し、て、御、助、け、し、な、る、を、
皇、女、手、を、し、津、行、屋、の、友、故、ら、ん、い、か、
買、ひ、な、り、し、い、ひ、し、と、い、や、か、津、行、屋、持、

津村家にも重く梅見も中々松とかがけり。元且
 池の端の書体も梅見書家書つゝのりも津村家の
 娘の志督も碑文に従祖才将谷保古の嗣
 とあるとある。いかにこの間梅見と見えぬ。又
 代六年武喜三馬の序ある七癖上戸の下の
 二

池の端の書体も梅見書家書つゝのりも津村家の
 娘の志督も碑文に従祖才将谷保古の嗣
 とあるとある。いかにこの間梅見と見えぬ。又
 代六年武喜三馬の序ある七癖上戸の下の
 二
 池の端の書体も梅見書家書つゝのりも津村家の
 娘の志督も碑文に従祖才将谷保古の嗣
 とあるとある。いかにこの間梅見と見えぬ。又
 代六年武喜三馬の序ある七癖上戸の下の
 二
 池の端の書体も梅見書家書つゝのりも津村家の
 娘の志督も碑文に従祖才将谷保古の嗣
 とあるとある。いかにこの間梅見と見えぬ。又
 代六年武喜三馬の序ある七癖上戸の下の
 二



中に酒成早んとしけぬ。折かしのすそみ

耳ちくも耳ちくもいひし。誰そ

白あつるのりきいひの誰そ 武喜三馬

つんぞうといふやうし島の志督いひのせめて

つんぞうといふやうし島の志督いひのせめて

と見えし。あゝ心あまの。後宙の生家も。板書三
 馬と曰康も。文化六年三月二十五日。二十五日
 こそ養子とす。いかに。此時より早や。板書三
 馬と曰康も。

初の名は真末。字も自真。通稱も其也。一
 云いし。養父の超花亭。宗瑚と云。直台司
 皆依の養人も。依末の名も。多く。板書三

三八の日に全日して茶を煮て、而も桶に茶を
煮たものと又音茶の湯、河原舟舞をかこ
ぬ、漢の古のまききききききききききききききききききき
糖き茶をこききき、桶に煮るのも茶向きといひ
お物をもちとあつた、きききききききききききききききききき
徳寺のお方の三字か五字か一行、まききききききききききききき
漢の古のまきききききききききききききききききききききききき
路まききききききききききききききききききききききききき
とわきききききききききききききききききききききききききき
不死といひきききききききききききききききききききききききき
七人物を福祿寿お代ひ、草木お代ひか、爾
かやうの仲洲へ入るる、まきききききききききききききききききき

又まききききききききききききききききききききききききき
今を改まきききききききききききききききききききききききき
七とくききききききききききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききききき
津波家の重き人をもとまききききききききききききききききき
桶の歌、お代ひききききききききききききききききききききき
津波家の重き人をもとまききききききききききききききききき
石橋の百五圓の善きぬ、漢の首のまきききききききききききき
ききききききききききききききききききききききききききき
月代もきききききききききききききききききききききききき
石の仁木、漢のまききききききききききききききききききききき
まききききききききききききききききききききききききききき

の如く、煮出し、所漬る炒米湯を出す。他の
 訪あり、いつか素焼の泡を扱へ上茶を入れ、古深付
 の祥瑞の模様の皿に、黄うす有木と白き枳物、赤
 枳物、三色の茶菓子も色どりに盛て出す。定式と
 せし、斯く煮と煮き、弟共枳物を心る。是も、南
 時津、経心、若菜、一若、ある枳一万あり有、一
 万三若、ある身代と云い、随人の體、後、さ
 だ、美き枳物多く花の如く、一字も萬、後、さ
 公平版の論語と執り、一、同ら、す、他、
 リ一本、平、入、り、若、及、く、も、亦一本、平
 あ、の、ゆ、り、届、け、来、る、も、ん、と、何、と、も、ら、は、お、の、取
 リ、入、り、を、き、し、し、の、流、ち、る、息、懐、之、に、さ、し、り、

茶の湯、六世高の伊波茶軒の次男、柏軒の
 宣なり、前年、霞社と云い、況文の歌、有、ゆ、り、代、茶
 と、い、ふ、流、ち、る、始、終、平、元、と、用、字、と、若、也、古、物、
 とも、平、傳、り、ん、平、い、く、似、多、情、之、の、あ、く、後、茶
 吳、波、の、や、も、ま、こ、ん、又、子、無、り、り、も、柏、軒、の
 女、く、い、を、若、也、こ、ん、く、白、酒、の、量、時、后、
 子、と、い、く、も、離、縁、と、云、い、後、み、中、の、三、河、を
 一、美、と、子、を、い、れ、こ、ん、が、庭、庭、之、の、あ、り、云、い、
 此、に、極、つ、て、極、つ、た、者、お、の、子、心、あ、り、こ、も、か、つ、れ、彼
 れ、が、若、物、の、通、人、に、あ、り、れ、こ、の、偶、成、ひ、さ、の、彼、ん、の、若、物、印
 り、若、物、文、庫、と、あ、り、の、七、実、家、の、若、物、を、な、り、若
 して、若、物、極、つ、た、者、あ、り、の、も、ち、上、茶、と、別、字、に、

たゞ思ひまゐる。女は慕はくし程の美男子であつたこと奈番
狂言とやり、奈とやりたこととを皆初耳である。尚
ほ三村作治が編纂した権斎考前集と得れど
んは二十通の古簡ぬめあり、伊津田軒の島成の
豆代山洲森林松園と書とやうの古簡も多し、同書や志
酒とて聞するよあかまゐい、

○附に兼一と伴の文意家モリーエルの脚本と後んてえれ
モリーエルは跡も十四世の宗を得た人と云ふから、十六
百四十年頃の人の心とやらは少くもよく自か
るあきもまつた。往年二三程後んが真を感じ
の、道化的エモリア洋山のよもむ地人の皮肉の有
るが、今も後んが、聞口存男洋の人聞

廻り、較々理想屋つくめあるが皮肉もある。或る花の
 未亡人が多くの束縛者に、天掟の何んぞ物一も
 なく廻りてくるといふ事許さるるに、とこそあかぬ
 べ、此の者の甚だしい衝動的の不和も、自然にあら
 所に特長がある。モリーールは、難い、本若はレヤンバ
 テイスト、ホロランがある。此の脚本の、お初めの
 悪かつりと、滑稽多と由皮肉、流芳の道化劇と
 異つて、現世法が多いから、観客に失望せしめるとも
 無恥のうらな。偏一途の真價を認めらるゝもの
 での傑作といふ福へんてみる。

○筆硯に供へる市守に散策文行者と三定ちり二の書
 の稿を結ぶ

二大正記山寺

此寺の天竺に出現のとも、さきへんの寺
 提へて滑稽な語を弄しつゝ、
 八義平の世の中、此程のよあふさう、出なり、此寺
 ハ短と探つし、左二一印と押し内窓の一
 班を切つての便りとも

色取山

八ん寺

内蔵寺

此寺のちかふハ、じと名もきぶ、
 ろくく、大門トシノといふ、
 十五重
 子をかあらうと呼びる、
 日と月と

日高中をゆめし出づ別處をやりてふに
 二三月はことのはる長詣多し七月は境の
 ところを花ともとも鐘四つ引四つと時を
 つまひのふる末社まじし神樂のまけんど
 れいこ持たふ近年秋のころ俄とまふ祭礼
 あり此家方々ゆめする人の家やしきとも
 近きまことことばらうしうはらんすお
 寺ろう

境内末寺
 ちう山
 太夫さん
 かげさん寺
 中さん寺
 角さん寺
 大さん寺

一もんいごいお末寺あり
 但し郊外の守りの地寺より出づ

一無題假本

春有まきの世下この素めがわらふ
 巻しと終る果め程とまふ

友人林若樹齋翁を拜祝の奉書也
 昔有る牡丹の池あり、古家皇帝と物
 貴妃并に宮姫の住にねあつても能はず
 へて●邦人の潤歌を守す、何人の畫しに
 こゝのいんさんい、河室をいふし、前のはん
 と或は寛文のころかとも思ひ、河古也
 んど、假読るく、切釋のもの也
 此方假読るき、四十田とまゐり、一ツを

買ふ候より、登橋の代りとは考へぬに出し
置らる。代價也。一四。

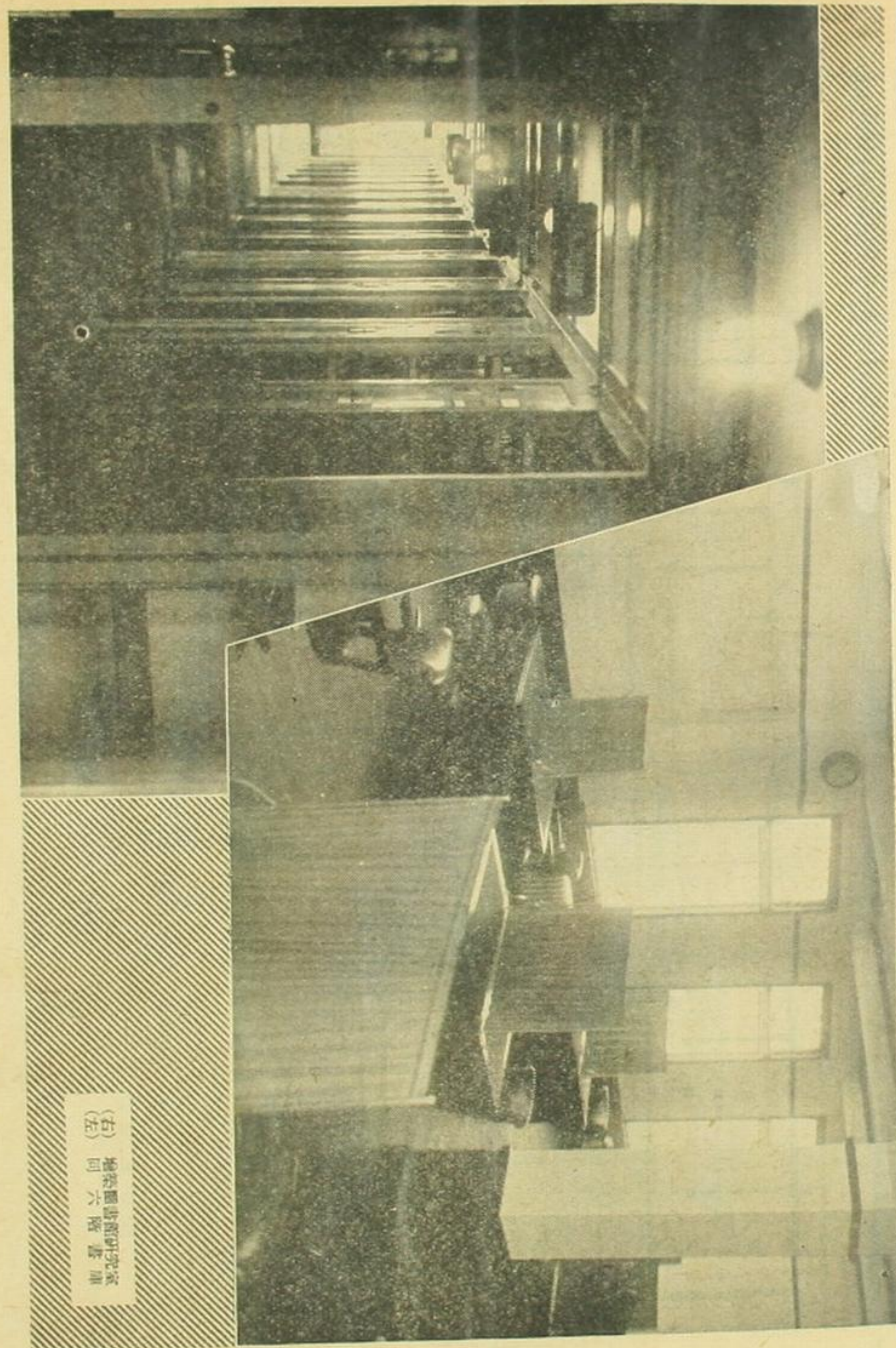
○あまの前持持物持長と過つた時珍らしくい山陽手筒
を得たと訴ふる。是れ種文のあるが、ち木木米の寄
せし手紙が、碎や中誤つて木米此の行燈を焼し
て生れ一つの心つて難いといふことと申送れぬが碎
毫と見くしロドリ乱業とある。木米が漢又重と
氣がつき、そのうろくひある朱米、此の傳ふが
てあるともふ、持物とありてあることと云ふが、山陽の碎
徳が、その珠と木米と並つたのだから、西の女由美
おを又う約束とある。

○ローパサンカあの上を讀みせてわくと、あるお持かあ

る。そのある人星の離れ人七道行しむい、老と女、
出遇つたとき、後む、其見えぬの、ま性と様う見え
と、七と、黄鼓の流を汲む主流と血の助の、よが軍
籍とありて、或る婦人と志意の關係が起り、遂に
して山へ入つてから或十年を住りし、此と云ふのが、此の
支那の婦人に引へて見え、志の満ち、此上よりい
何と、其後思ひこゝの、紙に、こゝの、いと自白してあ
然る、程任ん訪めし、志、婦人が、取し、あ、
どうしたかと、此と見え、良人が、いつしか、或る女と志
と、此の、ひ、嫉妬と、あ、自殺し、此と、云ふの、ひ、あ、神
化、と、この、境、ひ、あ、この、嫉妬、八人、弓の、持、前、七、列
頭、人、前、の、本、も、七、を、現、し、し、此、の、話、し、は、る、の、ま、話、か

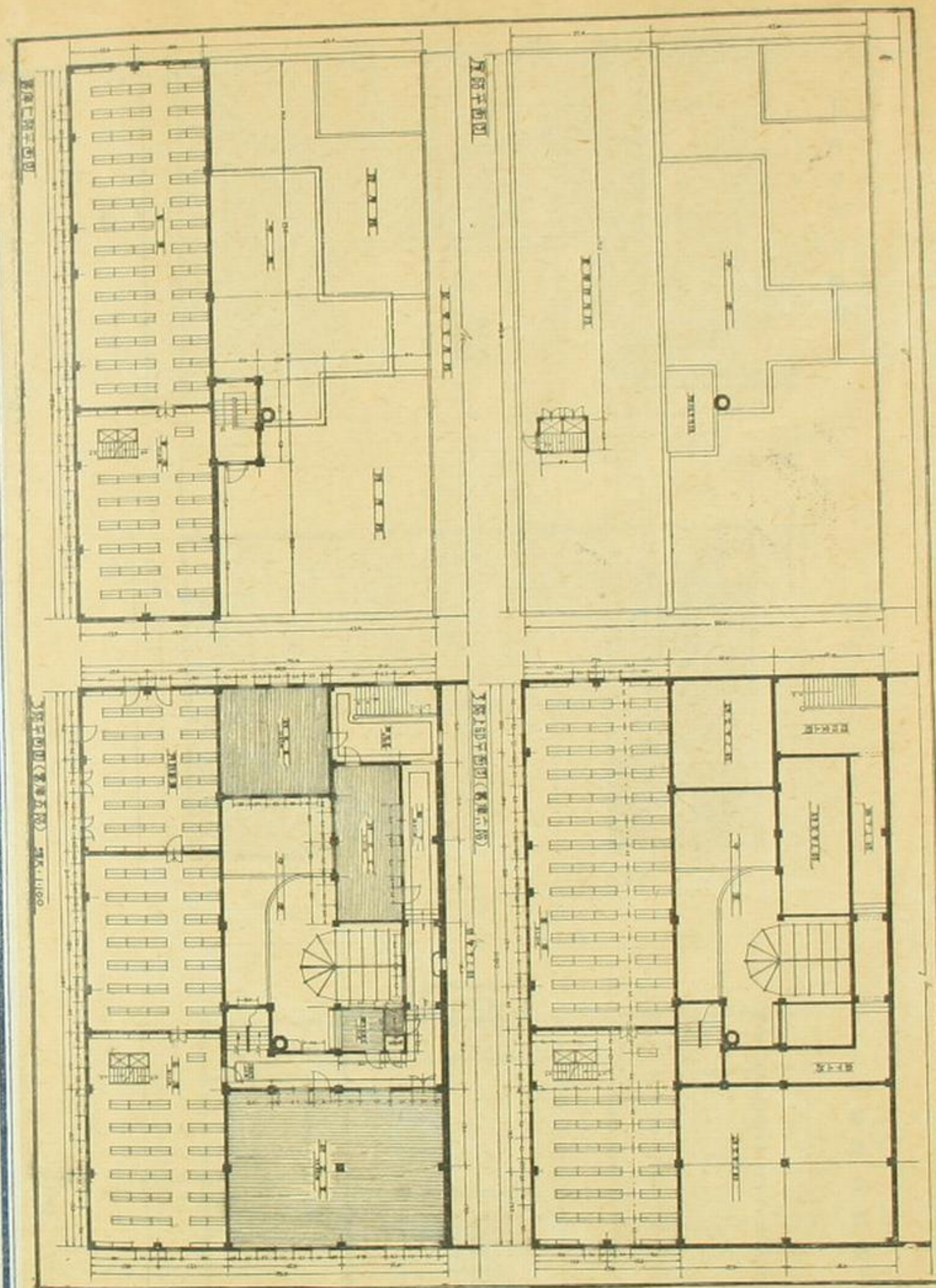
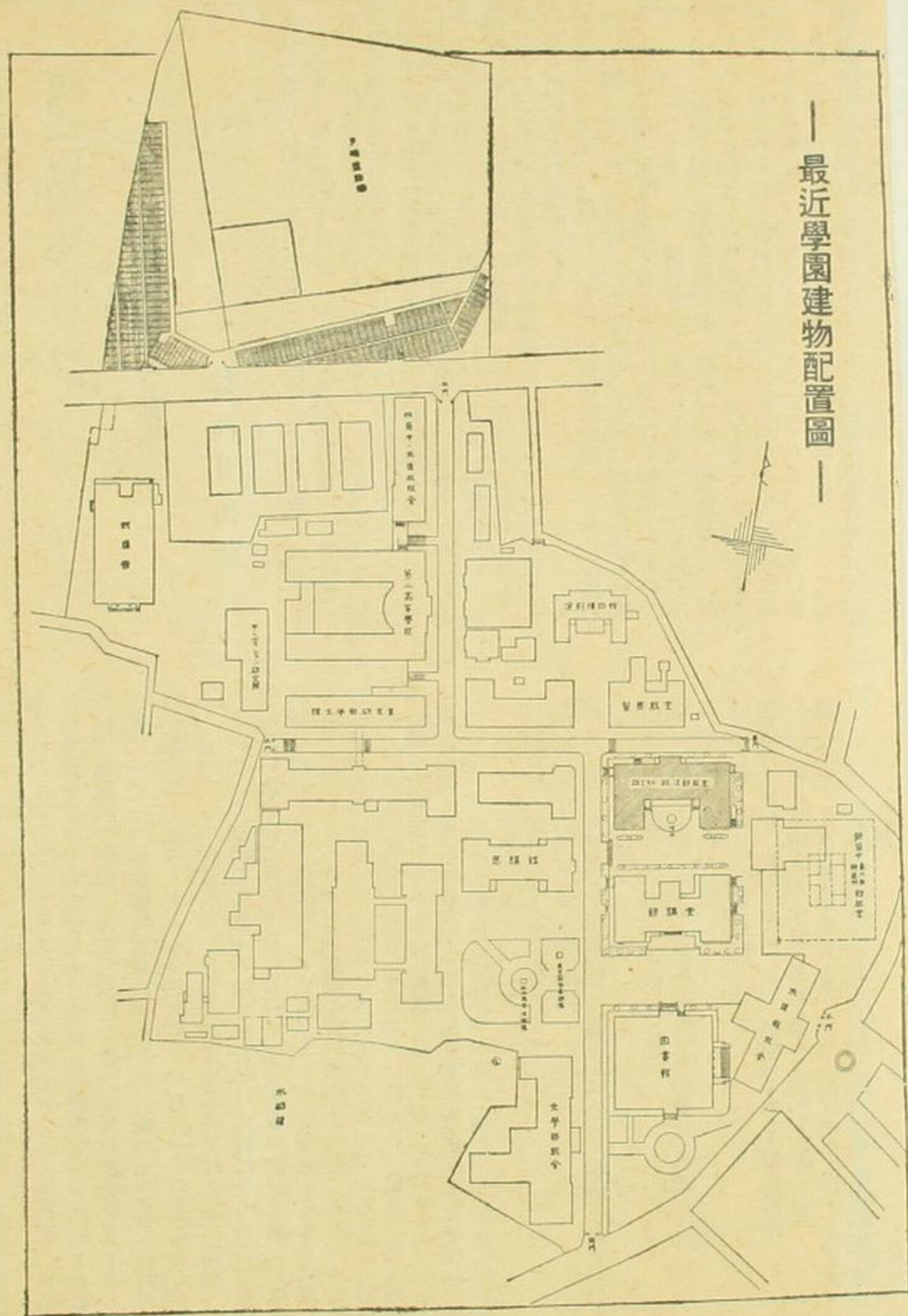
五月節
早稲田
芸報所
敬

(53) — 新築建築工事報告



(右) 建築事務所
(左) 同六階書庫

此と云ふ三保の松原に幽天が龍宮の天女と出遇つた
 ところこそき色氣の柳とある話を除ては多くは狐燈
 が女と云ふ人をもたせしむると云ふ話が浮山び、モシーパサン
 の書いれやうも人間味のあつた話の日本より少くない。
 ○まよ大巻末を連難三内年、下り書ぶ寺まは
 て午後法要あり余もあつたのまろおのち地の人々
 前約ありて行く所は、偶に柿瀬日年とも木重の
 印講の別院部ある木重を偲ぶ、木重を印に
 祝味あり、此印講七十八敷をぬち、木重の齡三固ち
 まう、印に世法四日名形あり、家別家の刀に係
 るもの多し、龍宮故人と追懐し感慨を伝くず、
 五月十九の午前記



圖書館增築 (右上) — 三階 (書庫五階) (左上) — 三階上部 (書庫六階)
(右上) — 書庫七階 (左下) — 一層

○ 秋山易の筆蹟の真贋の極りを自分におぼせし
七の近來のつとより多くあつた。元は人の限る
ハ人の限るものなり。その中にあるのは、この
知るる人が卒然目撃し来り、たゞその折衷の
を思ひ出したり。礼法七何れもこまに思ひ、
ハ其の或一人かを吾輩の徳定家とひて誤認
のつとあるまいか。動かしむる徳定をもひ
礼をさす徳定様。ハいくらもふたつある
不快なるをさしむること。つくく思ふ。うつ
り未知の人の品をぬき、安んずる徳定を
徳定の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る
を要する。全体自らの徳定家を以て任する

徳定の徳定

山陽の筆蹟と判する。その徳定がある。徳定は
徳定の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る
怨も買ひ、或の悪行を受け、その徳定は
ことである。徳定の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る
その徳定は、徳定の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る
く徳定の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る
りし徳定の人を第一の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る
○ 村山秋浦の岩休又兵衛勝以の徳定の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る
を持ら来り示し。徳定の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る
表特に別表や軸。徳定の徳定家と誤る。徳定の徳定家と誤る

か駒を弄してのる回び上頭と珠の三個器と盛
つて書とんとおる福神有人の款か如何しと流き
ての下部の右端を勝以の未印か捺してあり勝
以の真蹟のあり見ることか多の如くんの真蹟と思
ひぬ此の文晁の日本朝書筆家もぬぬと
真蹟のありありか市家や実業畑の人や割
て真蹟のありの今指を動かす画と思ひぬ千の
秋浦の買つてと手入を交と信歎ひぬ買手かあり
と自分の自噴示しぬ。花次前と採しぬ杉橋お長
から交へぬ陽の手紙の故を秋浦しぬら秋浦の
しぬりの手紙を知つて左の如く語つてぬ大
略を知つてを得ぬ



この手紙の木末と書つてぬと六兵衛の共
へぬの心付回しぬとぬと折檻と向香と對的
中野倒しぬ枝投しぬと遺域と六兵衛
と向してぬおも心とぬぬぬ又中りの行燈の
輪廓の描かぬとぬと六兵衛と後子難と
ぬとぬとぬと朱書かぬと注釈を加ぬ
ぬと山陽書問の内飯かぬと碎書と
る珠とぬと長とぬと二尺とぬとぬと
る五寸の位とぬとぬと三寸の位と勝けぬと
終にぬとぬとぬとぬとぬとぬと
向香と飲んぬ行燈を打破ぬとぬとぬとぬと
味もぬと朱書のぬとぬとぬとぬと 五月十日記

○海の子昆の味と魚類の味をのりしあしはよく
あい自合をい北海に遊べ北海は生ん日つむの魚
類を母美さうとも五五をのりよか城後の魚の大味
ごまふいらいと味さると胸のまっけともあつた。海を年
齡を市街を合味がさ達さると大味さると小味のよ
いこしを感す。小味とさふの味の細かひあることとさふの
ひある。北海の魚は荒海と強つてあつた。苦者しめ
つ。さふが考めぬもさふも共く強く味さふの味がある
のり自合をい長い河を波と強つた魚びるけんか
まふと思つてあつた。北海の魚は肉が締るもさふの味
鮮の氣もさると強つて風味のさふよ。北海の大味即ち味
の粗ささふの一味強ひある。さうしとも苦者しめ魚

魚類

さうよと生活してあつた。さふの脂臘がさふ肉が肥へ
味七流かひある。さふさふの魚類のさふさふ。所以ち
大郡今の排泄物。滋養とさふさふはさふさふさふ。波
清七流かひ魚類。苦者がさふさふさふさふ。北海の
京信の魚と強つて強さふもさふさふ。北海の
か北強さをさふ。強さふさふさふ。北海の
○今さふさふさふ。さふさふ。北海のさふさふ。さふ
くのさふさふのゆらさふ。強さふ。さふさふ。北海の
さふさふ。北海のさふさふ。北海のさふさふ。北海の
切符かさふさふ。北海のさふさふ。北海のさふさふ。北海の
時間の強さふさふ。北海のさふさふ。北海のさふさふ。北海の
した。さふさふのさふさふ。北海の酒と強さふさふ。北海の

へつからこいにおおとすとよから金七郎とせとよふとよん
御免下さいとよふと利頭とさうつづつのが随分妥協
すると半合とすこともあるとよふとよん。又ちく或る村
長とつと路頭と酒をさうつづつのがあつた。道行人の
洋山とよふと酒をさうつづつとよふとよん。おれと
と思ふとお前のたせとつとあやうのせや。性つとよふと
かと思ふとよふとつとよふとつとよふとつとよふとつと
分の氣をなふとよふとつとよふとつとよふとつとよふとつと
よふとつとよふとつとよふとつとよふとつとよふとつと
高の口豆腐のやうな支那とよふとつとよふとつとよふとつと
ことよふとつと豆腐と凍とよふとつと豆腐と凍の解と
とよふとつと凍つとつと紅とよふとつと帯とよふとつとよふとつと
とよふとつとよふとつとよふとつとよふとつとよふとつと

あくどいよふとよふとつとよふとつとよふとつとよふとつと
現に親とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
のよふとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
あふつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
任れよふとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

同じで後今の席上の富麗とよふとつとよふとつとよふとつと
求めよ人があつた。自分とつとつとつとつとつとつとつとつと
が飲やとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
七折をよふとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
打勝とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
書かきとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
を飛すつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

獨逸あるの書生ハ宿能を逃す。鰯魚の酢漬を以て
こんとロスマーク、ヘリングとよぶのであるが、どらーとせむ
餅まの酢のよめよの自合いの酢危に入つてエハダの酢
のよめをぬい、えを和粉のロスマーク、ヘリングとよぶのであ
る。向は他に誰んむむむし、下物がある。まんに梅干の
肉を磨つて山葵を度限し大根と人巻をすうおろしを
和す。人巻の粉が甘味をつけた。飯向ひあるが、こゝろを
梅と若のけし酒をすうめまよふ下物がある。すうめつた
○秋浦し、ふさんに岩依勝以の福神の御縁に割入
れ。松子とちけてゆらん。一考し、松が天を福聚
せあるとあるむおちしうめくも、ぬ入れ。すうめと画を
めも平凡である。黄葉の古きとすうめくも天

福の二字を大きく換者し、福を天新く多し
書假名し、魁胎の真故福神、圓と書し
松を笑福松と書し、黄と書いた。五月十日
の先次上座の美術館、洲いれ井重保の遺墨
長の法高千二二るの鉄換を生じれと云ふ。宣徳
がさくさくうらたあてゆらんが、大衆の解し難いあの
やうな画が多く、記者を志す。長もさう、勢はあ
る。初め、えと考をえ入んて出る。あま、三内
つの出るを命し、お色料、まを徴し、れとまふ。三内
出るさん、おち、千内、品の別着とせ、集へ、おち
あるさん、欠換を生じて出る。若、這、換をゆめ、れ
おち、集、換、生、じて、出、る、若、這、換、を、ゆ、め、れ、な

○昨夜亦禊書履を今更とあり郵令
 一酒後乾落、耽、あの今郵書のもの
 手河所、連巻桶、此大弟書む町内の方
 用七銘々を捨てるも板を、一、く、あ
 田、火前、住し、板、本、手、の、街、に
 へ、町、の、大、ま、の、の、負、捨、る、あ、り、れ、と
 今、い、の、大、概、の、何、の、意、境、の、一、と、武、神、の
 祭、礼、の、あ、り、し、御、輿、を、捨、と、出、す、か、一、ま、い、の、何、ま、ん、ま、い、と、云
 女、洋、の、主、派、の、豪、富、は、あ、り、し、捨、き、手、の、ま、い、と、や、り、へ、
 一、笑、し、也。御、輿、を、捨、と、し、壯、丁、が、ワ、ッ、レ、ま、く、と、ま、い、と、云、
 乾、と、三、村、の、ま、い、の、ま、い、と、相、解、の、葬、式、に、棺、を、捨、
 一、ま、い、の、ま、い、と、云、一、ま、い、と、云、一、棺、を、捨、ひ、ま、い、と、云、

不幸の家前を往つた事来りしと紙細き能く了紙を
ままとすべし。

伏の紙がいろし出にが止来典具状が盛んし外回入出ると
らふ何す用やるとそふと夕イ。プラウラウを夕イ。此紙
かろくせしとぬとすへにの初身かある。あ田加丹標
紙を心んと注入して見ると丹の色がおせしとくまひ。
深きと紙質の關係がありと昔しのをうらふよみか去来
ぬ。三村の二天験とすると唐紙の丹を深めると伏
果かよいと流つた。典具状に遠しにせうる模様のあ
るよみかある。傍書かよみか益隆に代りて用いれか紅
唐紙を台紙として上二張りと紙味のある標紙の出来
る。但し今の紅唐紙の色が散かるとよき選り紙は

取支那の紙よりい給と心術がある。えんま紙ありと見え
うけし。其実胡麻化しが多いとよみか三村七字のよみかある
胡麻化しよコエリ給と心つたことあるとよみか其法を
汗つた大あひ一枚の給と二分ばかりと断る切つてま
も一分程隔りて並べ其の河隔り別る紙と交へ、まを糸
打すんか紙をうけしとよみか。

陸奥甲の人柄の紙がいろし出に中二往年大分名も七八分
かある外へも向崎の別在に相付しに折ある四七相見えし出
席くれば其末席に坐す。今の高取首おれ其紙
法中十枚びしと客一回と名刺を配つてお抱下客の心
あつたことよ。前の陸奥荒木貞夫が昔年持った紙は
る千紙か三村の紙をくんとよみか。其夫

か河から北へ北時、辰と一箇を以て字をえ俺ん他日大正
よりと見えしと高家治し北の北手、故にが果しと其の直家
治と云ふ事一に其手紙に何なる人と三村が関係がある事
つらに北の時乃木將軍七人同いあるから無現いまの荒
い頃の迄分女道示せられたことか書き残され日記録四十巻
所の由ある事、まゝの世に受けとることを、所ある記帳と
高家と附して居るといふ、初め乃木は静堂と號し、花押
を、北郡を妻と印七月にまゝいやらうと云ふに、花押をま
歌の字を用ゆるの例にあつたこと三村治と東郷元帥
は軍神の如く仰せをあらうか、其の四家存亡の大決戦
前より無終の人の山本権兵衛といひ、暗に後傳といふ

河野

入んよらんかときむ思つたことよふまゝの四家分け目の大戦に
志あり切をまて北の時、東の地の住い、ツシク高きつた、運
ハラツとよん、まゝ流し出た、

五月十九日記

四家の文の協合、例今も外務省の亜細亞局長素
崎主計から支那の山状に就し、海流を聴へ北
人の早稲の出身が當り、春大漢口の領事とを
勤め、北の歴史が、支那通いである。
一時万筆にこころ、海流を聴き、自分も感し、北のこ
八支那七漸ゆく醒めつてあるか、如くである。勿論、海
流の獨立以来、日支の關係の悪化してある、相違な
い支那の歴史、向におとろくも、端的に、南面の事、
女も夫もくつ癖がある、満蒙事件の起つたとき

起るべき或るの歴史的な因があることである。この
 支那側面のみならず、中国として日本の満蒙の獨立を認め
 たらから日支關係が悪化したことである。が、實の日支の關
 係がよくなるか否か起つに譯し得ぬこととを知らな
 いる。今日よりして、満蒙も亦、その出来事
 支那のいつまでも満蒙事件をば、是を正す止め、此の
 から救済を得る自から覺醒せねばならぬ。其は實に後
 才も、あつた救済を得れば、日本のあつても、危く利を
 敵に可くする。此は事件の起つれば、彼等の或る
 ことの明白である。或る、その日、満蒙の獨立を
 認めざるべきである。若し満蒙が獨立したる、今こ
 りいソビエツクの為、金銀を奪はしめぬれば、
 此の邊境は、五細五の邊境である。

こんと一理ある觀察である。支那も進んで、其の
 てある趣があった。この論議、其の側面には、國際聯盟
 の協定を認めるべきであることと、覺りかたの未だ、
 此の邊境は、五細五の邊境である。其の邊境は、
 媾和を企圖するべきである。五細五の利益は、
 らるべきである。この、日支の、五細五の大國が
 互いに認識を、然らば、歐沙四の、及ぶ所である。日本
 不教に考へ、儒教に日本の文化を、延び、是れ、
 望むべきである。此れが、支那の、即ち、此れ、
 日文化の、運ぶ、日本の下は、存する。日本の、
 維持する、西洋文化を加味、
 支那も、こんと、あつた、けんか、と、若き、り、

あるものありのものと事なきが、此れ孔子の祭典と行
ふ、并書とありし、日本のありあを保持せんと、滅ぶありし、
此れ、蔣介石が一行の社会改良運動をやつてゐるもの、
元寇の現れんか、知れんか、この支那の生活の弊を改
め、日本の偽徳と云ふものありて、例を奉じて、支
那人の顔を洗ふ、必しを洗ひ、洗ひ、洗ひ、又洗ひ、
温かいものか、冷たいものか、口を洗ひ、洗ひ、洗ひ、洗ひ、
日本人のこころの冷たひ、顔を洗へ、冷飯を食へ、日本人の
他慮が、武力の強さ、いのも、其為れ、と云ふこと、
昔も、漢朝の漸やく、醒の申れ、一徹のあり、
支那支那人の利害の打撃、其を、
つるが、其文化の、名分を、重んずる、特性が、

漢の

か、名分を重んずること、一行の道徳の、
いか、重んずること、
自由の、
日本と、
を、
列強、
政治的、
差、
亦、
蔣介石、
と、
の、

を保つ方便ありとある。後々、存が北討伐
を病めるときに即ちの存の亡びの時である。とあるのハ
北の討伐の爲り、六十番の大兵を捕へ、二人を動かす爲
り、二十番の軍費を徴せし得るかと思ふ。とある。素
向きの親交である。ことを附け加へる。 五月二十の記

○客より書家萬然無聊と窮し酒を飲めし。他人
の道の鮎の~~鮎~~漬焼を定めて、~~鮎~~中玉鮎の美も、
の塩田：蓋すすの味右の作らる。鮎中玉鮎の美も、
亦塩田多き所例として、皮の竹を半ハらして折り包
詰す。と云ふ。雅致あり。申判。塩分を合ふと云ふ
蓋：醬油を初と蓋すも可なり。余性年備中、
酒い野出左武郎の家におく。漬焼の徳を受け

酒い野出左武郎の家におく。漬焼の徳を受け

函来と氣の節あり。野出折て後贈と得ず。又方
振得て、古を教へる。量と返す。所後紙を陳心
と前奉り日酒持を返す。吟誦する。揮毫を可とす。
毎字毎句と味ふ。書す。書す。書す。吟誦し、酒氣
沸々無字。越香あり。二一状。山月。後酒の
を返す。ふ。何と云ふ。誰を紙を情を返すと云ふ。
知ぬ。白書す。ことハ多。心より命の押さる。内あり。
出づ。誰の返す。返す。と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。
の。多。い。ん。五。志。一。紙。白。合。の。者。い。ん。よ。か。る。い。
時。多。の。花。一。巻。と。云。ふ。も。陰。を。不。可。ひ。ま。い。と。云。ふ。の。
し。て。皆。書。き。ぬ。す。ぬ。と。云。ふ。の。事。と。云。ふ。の。事。
の。尾。出。行。雁。か。の。四。の。家。を。と。云。ふ。の。由。朝。し。て。か。ら

たいてい思つていろいろ語つて又いろいろと思つたが、山本はひと
いつんぞびろろく話して骨折れんことやへてあつたし
山本が山本と著りて山本代状傑作と云ふ書と著
て一日執筆してはんと語話と交へる代へは、此もま
はんが交へた多くの政治家としての交遊や其人物評
や自家の政治経歴などをあつたものがある人の政友の大
概自分の知る人があつたから、多くの事實は目合ふ身軀
くくさつたが、彼の人、おもしろい親戚のあつた人おもしろ
特徴があつた、**素**おもしろい感するところもおもしろい
か、このころは種々感するやうな記述もある、全体
尾山、傲岸の氣取り、其の言説のつとむる行ひ
あつた、此の逸事、此のあつた素保、あつたの、**素**

やくあつた、このころは故に、あつたか。

彼人のあつた人、素世凱と桂大守、彼人が狂歌に云く
素世凱に我はすかぬ人二人あつた大和の桂、**素**
素

増ちと、増ちと、人の折きぬ時を待たぬ、素世凱
カイゼルと對して

カイゼルも増ちと、あつた、増ちと、増ちと、
雨もあつた。

西園寺が三十四の全権として平和公使、臨む時、**素**
素の歌。

血の涙雨とあつた、只中、花見のあつた、**素**
行く

〇偶むらさからあま山子と具と感しほゆありと云
一三枚計りの圓がうらなまを狂言中の瓜盛人
かま山子の脚長にあらむはゆゆのまを倍を頼ん
たが、ほゆのまを狂言と云れことかまのから書けぬと
断つれゆ、和直書とい信曲の紙味家が後力のくか
ら、いんをこと書と云ふとい、此年のまのこ頼ん
ゆと感しうらうら、うらうら、もつとんまの、信使も
一通其狂言と云れしからと云ふのを待つとぬるとやつと
日出未とぬれ、この狂言、あま山子といふはうらうら、瓜
盛人を捕へる為、人河かあま山子と云うてゐるのゆか、
く書や面らん、まの人のまの、あま山子、信使も、
へるる、あま山子、人河と云つ、うらうら、うらうら、あま山子

が動くのが、テテと思ふ心地を、あま山子、一七、
うらうら、あま山子、狂言と云ふとい、圓があら、
あま山子、狂言中の、狂言のまを、あま山子、
あま山子、い、うらうら、あま山子、信使も、
あま山子、い、うらうら、あま山子、信使も、
〇尾曲の情、あま山子、四、五、
一、大隈屋、あま山子、信使も、
二、人河、あま山子、信使も、
一、信使も、あま山子、信使も、
あま山子、信使も、あま山子、信使も、
一、信使も、あま山子、信使も、

着て荆棘の津山あり草庵をあらやう心おぼや
どくく行つて引こけ毎ま一人と面をみせしむ
感のありた

一 作賀の七葉ハ甚に腹味ハ胡麻化しハ利く、こゝを
利用して大隈侯ハ三人に命じ一ツ子をも三振ハ語つ
て三人を満進セセルといふ事ハ親交あり

一 大隈侯ハさうさうハ大さき事と云ふ、男中ニ向つて
君の選召ハこの度セハどの位あるか、伊勢の二郡
と志摩の全郡と紀伊の二郡とをまよと、ソエの地雨
を降んち買つてハいふが、政府の干渉ハそれとあ
り得日まいと

一 嶋山ハ先夫ハ郡部ハく進退をたぬれ、ことある、一

の家、丁度郡部ハも来り出てくる道とあつて
あつた、有権者ハ性もゆる、上守者ハ嶋山ハ
以前ハいつか由美桶車ハ差んがあれ

一 伊左公ハ胡部ハ任じ、際ハ或ハ刺客の
度ハ驚んことを恐る、今朝ハ遺言ハを送り、又ハ
十景の目と云ふ、昭々命ハ公ハ多ん大さき
産ハあり癖ハ粗故ハ性ハ多ハいハつて、
来ハのむ書ハ遺言ハ状ハ見ハ

一 海ハゆきと速ハ侍ハ東海寺ハ、こハ大甲
も幸ハあり、小軍ハ将軍ハ

一 山崎公ハ馬ハ、心ハ大希ハ、御膳食ハ、
つハ度ハ、誰ハ口ハ、陛下ハ、申ハつと、

懸下山の如く事々を清問しきりて左様の事ありき
 のと申上けられた。是が退治の隙先刻陛下に申上ければ人かた
 ぬと呼び止めて、お七陛下に傍り申上ればと流ると山おの
 平成とて利書も斯くお心をせぬ。武士の面目が立れば
 と、(武將の体面を替へ難いと清承の事)
 一 星亨が通に大目時代属徳の活大目、頭腦のよ
 のに敬服した。星のいつも主安未若など下級の出来事
 七日前と呼びいらく、賢治の如くして其の心腹を
 悔しと
 一 松方の子福若の人のあつた次大目かあつた時、人
 の子かあつたと清問しきりて、時松方に咄嗟に書
 か出さ、何んを清問に申上けさせしよあつたと

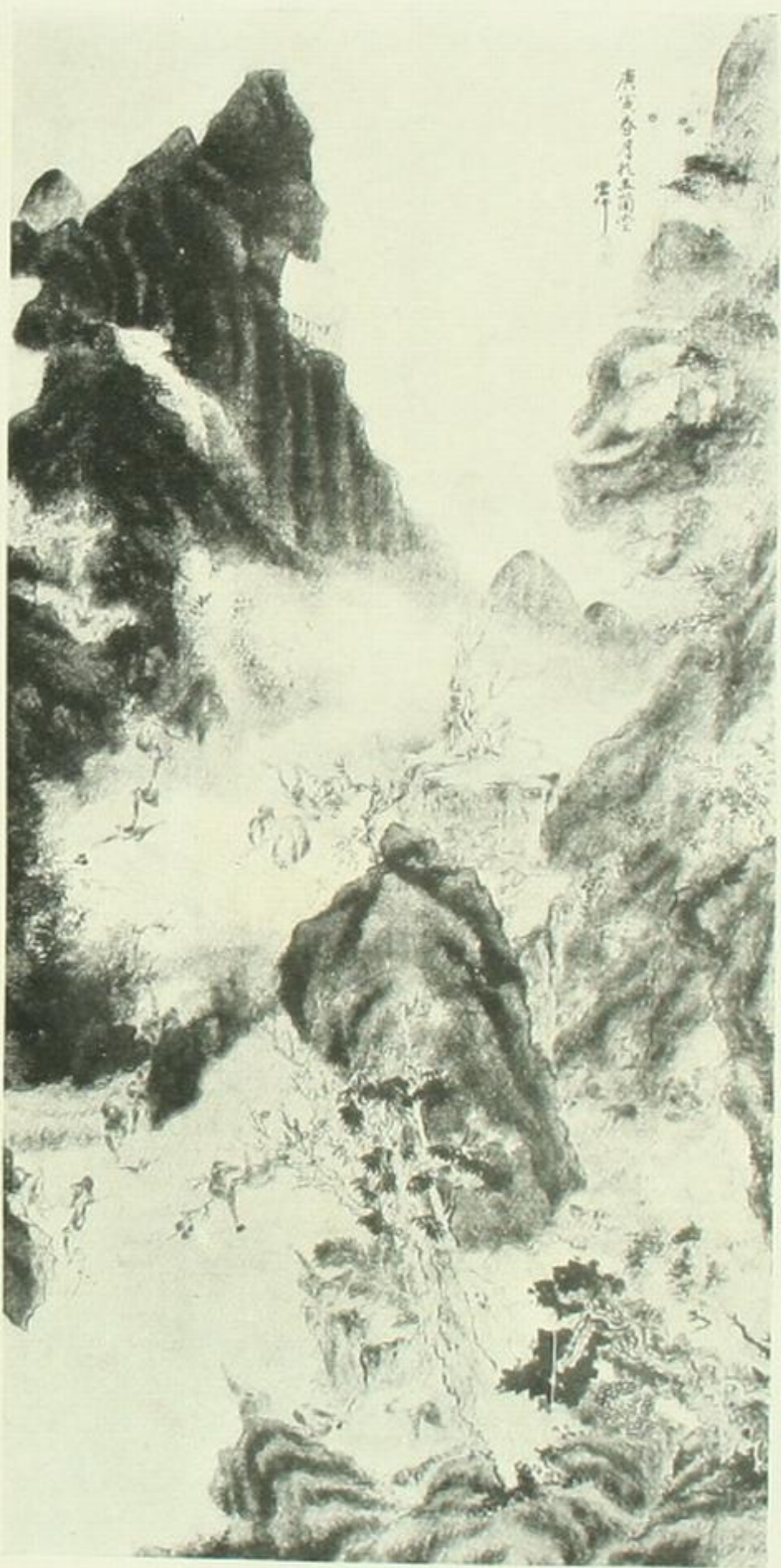
一 榊本西隆の屋敷を獲しきりて、是が居れば腰を
 掛け大將振りのまうく、主派の板身の槍を小
 脇に抱込へ、わりのいごうか、槍の代り、来配を持
 つたりきりて、
 一 海を四武が尾ぬの東京市長とて、以時定むれば
 和歌に云く、八重の海風をき起す海神、おた
 ちのあに任あせりて、
 一 往市と流しきりて、元勳の大隈差のや、
 後春家や、仰も流しきりて、黒巻の流し
 ようとて、或る時、あを向けて、唐船、豊船のり、
 船、河を、さき、外へ、と、
 つれと、

一 大隈侯が首打を辞す時後任にかなるものと奏
薦されしが山好の之れを非として寺内正殿を奏
薦され、大隈侯の奏薦すると直ぐ退却し
たが山好のいつまでも幕内者に長坐いつておこ
遊、殊を制し大隈山のまゝる所、このまゝ
あり、

一 西郷隆盛ハ大人物であると誰人も推稱せんが
何故であるか、之のいふ辭を得るべく、或は時
意惠院を詣りて如く西郷を又出され度、南
より、就て入役あるも、性がある特徴を隠
す所、假令利己的であるが、有性といふべきは
也、ハタトキを拍ち、其の又善性が、西郷の

偉い所はと漸やく西郷を能くし、後つての
2、 六月廿九日記

○この書目の書意、骨董屋の、雪塚のフルベツキを云
々とする書簡の字をぬき、このハ、南の坊内、改列せし
んば、よか、其の字と、歎いと、思つたが、古文で、一字一得な
うつに、こんどフルベツキ、は、ほんとう、雪塚の支那、海
リ、る、証、物、あるん、雪塚、信、ま、ぬ、家、の、材、料、也
雪塚の支那、海、リ、る、証、物、を、た、り、し、る、こ、と、を、い、ひ、
久しく病んでおこ、ん、ま、の、海、ま、見、く、て、病、を、ぬ、か、
た、く、死、名、中、村、の、長、命、の、其、家、ま、り、長、年、株、の、因、り、
坊内、現、ん、る、作、名、の、む、ら、り、よ、の、ち、ん、な、海、を、ぬ、か、



長井雲坪着色秋山群猿圖

(絹本 條幅)

長野市 船坂恒久氏藏

長井雲坪

雲坪翁の尺牘

フレック博士に關する

華翁拜見御平安奉賀候、畫帖も認め居候、夫に高橋善次郎ナルもの屏風畫
 又は畫帖類りに催促申参り、是も昨年書齋書齋之際金五圓屏風畫料分借川
 致候故、セマテ畫帖ダケト存是も認居候。御畫帖ハ不日認差送可申上候。

大恩人米國の人フレック博士本月拾日死去と聞 悉傷落涙千行萬行、
 先年長野へも數回被參候得共違ふ事も不相成、如何となれば抑生長崎に遊
 々中只今の位置と相違ひ金錢に不自由なく、フレック氏と同等之交際親
 親密々、殊に大學士故書齋も澤山ある人にて、逢ふ毎に互に胸襟を開き

清談終日に及び、只今の處にては抑生如洗之赤貧の者故、長野に参られ候て
 も参るも不相成、被參候ても取入事と存じ居候。此恩人如何の事と申すに、
 抑生交那行きの際参るに道を失し、是非共フレック氏の御周旋無之とて

は迎も参る事不相成、フレック氏に一日願出候處、日本國の大禁を破る
 者に一命をかけて御周旋被下、此恩分ハ山よりも高く海よりも深く、御死
 去の事及聞や寝食不成慨嘆殘懷遺恨萬々、只々フレック氏の尊靈に香花

を御へ朝夕拜謝するより無他事、夫故に何事も手に付かず御實被下可
 候、俗語にも貧は諸道のさまたげと申事實なるかな、抑生の如きは貧生故
 諸方に不實不義理に相成不止事、是も自分の勉強の不足の罪と己れを責む
 るより外無之候。是より一層勉強致しフレック氏の尊像を自分に認め、

其下ニ精々勉強の上蘭一本も認め、終身香花を上げ拜謝する事に仰座候。
 東京の直入の盛大なる事被仰聞意入候。抑生の如者畫料直上げてました
 なら俗人が雲坪は上手に相成候や、僅上したそれ頼めやれ頼めと續々依頼
 有之候ては却て抑生のため相成不申、手習のサマダ畫店の不繁昌ハ却て
 僥倖やらんと存居り候。先如此尙後便萬々頓首。

明治卅一年三月十七日

雲坪拜

中村六左衛門様

○尾崎氏の道若外遊の想を皆も羨み如く
と云後こしに格別おもしろく感したることあるが倫敦
のジヤハンソサイテイに於ける講演ハ一談の價値がある
一寸興味があると思われ記すを左に抄出しておく
ハンチードレヨウが自心のを試す時あるものがあつたとあ
げしコンナ下らまへ芝居のういと云ふも、こヨウはまゝ
羨むも、俺んもそう思つてゐる、あつて之んをつまらふとい
思ふもあつた、と云と僕と云ふ、あつて人々の面を思ふ
ゐるから、どうすることも出来なうといふ
福邊にビスマー、ヘリングと云ふ類の自酢談がある、
次にトラウ、ヘリングと云ふがある、と云、東洋ヒットラウ



かをんを嗜するが、どういふものか、と云ふと、
者云く、ビスマー、ヘリングの致趣と、脊骨を云
ふこと、んか出来ませうといふこと
日本の俄な、無産を云ふ片目の南と云ふ、泳ぐか、或る
演説中、自心のを観察して、と云ふと、野次が片目で見
つゝと云ふと、南ハ一目瞭然と云ふ、と云ふと、
亞米利加の自動車、長ハエライ、と云ふ、城道、
年、と云ふ、けし、め、と云ふ、が、困難、と云ふ、
全、回、の、
度、事、の、
亞米利加の家、庭、庭、築、何、十、階、七、層、と云ふ、
花々上部、と云ふ、部、屋、代、の、床、と云ふ、
空、手、の、
上

ふいふ何事もなく去来せよのから。

○本朝の辛峰ハ吾邦里の画家ども書いたが表くも死
見だ、自分の家も柳を畫し、双の扉風がある。その小
切を物にし、その見も下し、書畫意がある。アツサ
リ者いれ、秋景、秋の畫、表の在の、題詩の如く、ある
誰んの時か、画、画、画、ハマツてある。

罷釣の事、數本、江村日暮、お悠、一、春、秋、

是、斜、場、お、紅、英、白、新、不、耐、秋

○東郷元帥ハ去廿七日、海中に公日：重態と云、今、朝
七時、薨去と云、日、宿、法、親、作、功、を、運、を、改、を、言、す、
ハ、秩、伯、の、志、終、と、云、く、我、海、軍、の、大、看、望、い、ち、あ、る

源の

た、の、惜、ち、へ、さ、し、ひ、あ、る、動、切、に、傳、う、疾、音、に、阻、音、と、ん、れ
何、ん、回、美、并、い、式、を、行、ふ、の、か、あ、ら、う、東、洋、の、子、ん、し、ん
と、祈、々、ん、に、斯、人、斯、人、こ、も、世、界、に、由、く、い、ん、ん、人、其
の、妻、云、ハ、世、界、に、セ、ン、セ、ー、シ、ヨ、ン、を、起、す、ま、あ、ら、う、東
郷、ハ、運、の、人、と、い、う、く、大、多、く、海、人、ハ、決、意、者、人、と、異、つ、れ、所
か、あ、つ、れ、い、む、あ、ら、う、英、雄、ハ、往、く、思、う、く、如、き、と、い、か、あ、る
西、郷、ハ、六、然、り、也、唯、れ、即、ち、時、ハ、海、人、ハ、果、然、而、決、起
人、的、の、行、動、あ、ら、う、此、一、事、あり、英、雄、と、云、す、ま、あ、ら、う、元、帥
の、長、考、ハ、亦、り、凡、々、さ、う、也、壯、英、者、ハ、海、人、ハ、時、も、亦、り、凡、々
皆、し、る、似、也、臨、終、の、際、形、ハ、既、の、傳、ふ、者、左、の、料
却、校、の、如、く、い、あ、る、吾、等、ハ、斯、人、を、失、へ、う、を、慨、す、と、共
く、弟、二、の、在、り、の、起、ん、ん、こ、と、を、勉、勵、す、所、く、也、
相、記、

名將病篤しの悲報

英國朝野を衝撃

東郷さんを我物顔に誇る

永久に輝く大將旗

世界的崇拜の的



式揚掲旗將大の贈寄紳元

「ロンドン海軍大臣二十八日電」東郷元帥の病は元帥を「イギリス自國の元帥」と認めて居るイギリス官民に非常な感動を興へ各方面とも同様に敬慕して居る、イギリスと東郷元帥の

大奇縁

はキーパー海軍大將の幸あるイギリス艦隊が馬島を襲撃した時に始まる。その時元帥は十五歳だったが、その防禦に當つた事からつひにイギリス海軍研究を患ひ立つたのだといはれて居る、元帥はそれから八年後の一八七一年海軍士官として來英し、テームス航海學校に入り一意専心黙々として勉強し、同級生の敬慕の的となり、次いでロンドン郊外ダリニッチ海軍大學に入學したがこゝでも軍人と人格は異き「黙り屋の東郷」のニックネームをもらひ余りに偉いため却つて偉いかどうか判らなかつたときはいはれて居る、海軍大學在學中例の軍艦比叡の建造を監督し一八七八年に八年に亘るイギリス留學を了へ比較に乗つて日本に歸つた。

元帥が日本海にロヂェストウエン

全滅

させた時には「それ見よ、イギリス仕込みの東郷が艦隊を撃滅した」とイギリスの人氣は沸きたら「日本のネルソン」と呼びはせられるに至つた、日露戦争後はしばらくは東郷元帥の歌がイギリス全國を風びしたのも有名な事だが、東郷元帥が初めて艦隊の士官として學んだ由緒のあるテームス航海學校付屬軍艦のワスター艦には以來その學生室に元帥の肖像を掲げ日本海軍の壯烈なる戦ととも二帝から授けられた「皇國の興隆の一戦にあり」との信箋が日英兩文で額として掲げられ學生會の的となつて居る、然して右ワスター艦では更にこの偉大なる海將の功績をしのび學生の修養に資するため特に昨年元帥から大將旗の寄贈を求めその寄贈式は同年十月十二日同艦上において行はれ當時のロンドン駐在海軍武官高須大佐が参列した。

功績

無敵的將軍たることを賞讃し學生を感動したが、その大將旗は折衷折衷を清く研ぎだしたテームス河上に、へんぼんとして日本の國歌を清くなく奏した、高須武官の送迎には同艦上より艦隊の響りもやまず、實に感動の涙にむせばしめたものであつた、その當時のイギリス新聞は「日英親善は日英同盟に始まつたのではない、それは三十年前に日英海軍の間に對善の萌芽が萌して居る」と東郷元帥の偉大さと功績を稱へたものであつた、ロンドン駐在武官高須大佐なども

日本海軍より三、四百年も長い歴史を持つ海軍によつてその領土を安全ならしめて居るイギリスが東郷元帥のロシア艦隊撃滅を稱へ尊敬して居るのは恐らく母國以上だといつて居るが全くイギリスは「東郷はイギリスがだした日本の守護神だ」と誇つて居る。

平凡な毎日の生活 無理をせぬ父

急遽吳から駆けつける車中 次男實中佐は語る

東郷元帥の次男、潜水母艦長、東郷次男、長東郷實中佐は二十九日午前八時三十分東京警署の列車で吳より歸京、別荘の急兄弟宅で曹長を車中へ着更へ元帥の病室に赴いた、同中佐は車中で幾度もその後の密談を訊ねた後、

父には去年の十月に會つたきりです、その時はまだ元氣でした二十三日に父の病が重くなつたと報らせて來ました、軍務があつて直ぐ來る譯には行かないので休暇を貰つて昨日發ちました何分年が年なので途中新聞を見て心配して居ります

ありません、世間にもありふれた父親なのでせう、つまりこはい所半分柔しいところ半分ですが特にいひ立てる程嚴格でもなければ、また甘やかせるといふ方でもありません、世間でもいふほど沈黙ばかり守つてもありません、しかし冗談などをいはない口数の少ない方ではあります



父は毎日同じことを繰り返しただけ取り上げて、かういふことがあつた——などと思ひ出すやうな種は一つもありません、父は話の種になるやうな奇抜な事もいはないし、また一つ話に残るやうな面白い事も致しません、父は別に父親としての威厳を作るなどといふことは少しもなく、何時でも當り前の調子

でした、折にふれてまれには小言をいひますが、それかといつて特に自分の子供を自分の思ふ通りにならせようといふやうなこともありません、無理をしな

○日本の漫画の歴史を書いた見たいと思ひます先んから
 漫画の書物を探つて集めてみるが、皆々鳥羽伝と
 ちよつておもしろく流石であるといふが、集めてみるに
 難い所も方出ぬ、耳島高系統のものが多い、
 俗に耳島高が柳高を父と云ふといふ、且つ
 鳥羽伝の一方の流石といふ事もある、自分も手
 に入れたもの、流石の所も出ぬ

耳島高集の漫画

鳥羽伝三回巻三

鳥羽伝扇の的三

柳高集の漫画

海遊狂歌合 二冊

狂歌集上巻
 下巻
 全部
 拾

柳高集と海遊狂歌合の二冊、四條家脈と思ひ
 ぬるが、此の耳島高集、三四巻、扇の的、扇高
 集の的である。

○自分の巻後閑散の時の多く、あつて一日を消す、
 一時は考案をなす、程が先月の如き、
 流方から空の稿を頼せん、閑入任うせんと、
 いて、随筆も空の稿を頼せん、毎日課のやう、
 き、既に流方や、出たりもあつて、来月に入つて
 掲載せぬか、五七巻つて、七八巻の分も、書と
 流方集のいふ、行い、先月の如く、
 半日の実人と執筆の時を消し、
 老い子、さう、さう、種と思

いあらうい。青いもの興味のあること。或は四の五の
し隠著しと登載してあるから、書くべきこと。他
未めぬ人々、差あり思ひ付けいれよ。大隈侯の大
名旅行しと、姫遊笑遊漫遊の二つ。命を兼業
である。侯の大名旅行を委しく書く七一頁の
こと。姫遊笑遊漫遊中、自分の趣味と投じれば四五の
回の丹精を注いで、監督したことや、光琳が市豪
の裏の爲め、不意の故多しとあることや、谷文
晁が吾名の爲めいろく、街つれことや、三井屋波衣
が異情を持ち、四の五の竹馬の竿、頭は風を吹か
せ、いつかこれとさういふ、んまを、隠著家へさき見

残してあるやうに、筆を弄して見ればと思ふ
○日本圖書協会の宿徳の彦音家、松浦吉作
：酒人として、竹馬の竿、頭は風を吹か
せ、頭を去つた。松浦院をめぐり、平生月七
い身命、無が其所をとも思ふが、入つて見ると
ハ初め、玄閣と入ると、印が、あつたの寺院
七、遠入つたこと。正面の宮、階あり、まんと
改ると、左右下側、又階あり、民寺才四
郎の余の宮、まんと法廷の才六、階あり、三階あり
の、七と、控所へ入ると、呼び出しを待ち入廷する
てあつた、今の湯殿所へ入ると、まんと法廷へ
入ると、まんと、いろくの事件の人や、赤護士が、

居してあり。午後十二三若し出座してあり。十時出
廷の道にあり。九時少し過ぎを出入すと早
やいさくのまがわら。銘の多く出廷するは自死
順者が早い。許すの。受るは難事がある。席の
入んは若椅子がある。そこは喫煙も出来る。此が
奉抱して法廷に入る。元油へを待つておる。と
二三件を尋ね先んはあふ。十時は次第漸々
判事か陪席二人と現文の。一日起立して敬礼
を表した。自分、関係の事。件は原故の未後
士が種々申す。疑る。前案にテキ。ハキ。或は証人の喚
問を許し。或は次きの出廷日を定む。等。其の事
く進行する。陪席の協成する。或は死に形はあり。

ある。十一時やつと呼出さる。判事の前には元印
せん。宣旨書。記名油印。元宣旨文を四五人
みつ。この。評議。先ん。訊問。入つ。判事の
ハ。何れも。前案。ど。あつ。終る。被控訴。未後士
か。自分。背後。を。尋ね。未後士。と。席。を。列。せ
み。れ。か。回。り。自分。の。評。議。不。加。あ。つ。先ん。の。評。議。を。自
分。の。評。議。を。退。席。し。其。後。を。尋ね。未後士。と。し
何れも。宣旨。の。評。議。の。評。議。を。勸。後。し。且。つ
判事。三人。の。評。議。退。席。して。合議。した。と。云。ふ。か。其
後の。事。の。評。議。の。評。議。を。出。廷。日。南。一。回。上。す。其。の
控訴。評。議。を。今。朝。為。評。議。の。評。議。を。得。れ。若し。一
般。へ。可。う。評。議。の。評。議。を。得。れ。六月

三の記

○初夏より自分の庭園に新緑積りて、
かたき草を換つて、新しくい草が折り重つて
まのやうな草も、まの夜燈を没し、
を折り取つて、夜燈の火口をあらしめて、
の間に枯んば草の交つてゐるが、
之れを陰にして、隠んば草の今更の交は
ひあるか、毎朝夜草を掃ふことか可きうう
さくもある。自分の庭園に別々七草の
小山林といふ呼ぶが、紀候に少くも
林である。米庵の小山林と云ふは、
真似のいふ。此は、人の自分の庭を

三の記

見し所中、あるの庭園のありと、
ハロイ枝様浸の小山林といふ、
ふからうと、身ぶりの別々、
ふふハロイ向而七く、
偶れ亡友改口土堂の、
防か一粒あるから、
かへき、
口は来あきり、
の顔面を、
たの敷語を得れ

六月の記

菴軒夜月洞
渙然袖解

解脫三昧
紅梅綠意

身寒るる

楚曉清芬

千秋風雅

漢教去廣吉

風折冷月

一正塵るる

劍氣吐長虹

乾坤一殘舍

風暖鳥初碎

疎花春暮

○清遠華山の馬琴の徳宗宗伯と意の又人ひある因縁
から華山と馬琴の交り、宗伯の死に時華山の宗
伯の像も著き送つれ其像の華山の馬琴の兄弟
ハ徳宗を村不持しとわかれ先年一見を甲一
け此ことありつれ、其年紙に其内貴兄の自像
も描くとありつれ。古川修が南高徳宗と宗伯の
二書いと括りて華山像の内に馬琴の華山と云

故言の圖二枚書かせることや此紙雪譜の像子
二人
二字を候つりしを頼みたりしとありし初可
るふか、若し此を頼みと華山の宗伯の遺像
と見せしとツチをとりし記すあり、卷六の爲め

馬琴の『玄同放言』の挿繪を華山は二枚書いてある、彼の『心の掟』にも馬琴を聞て廣め書籍を借用致す人としてある、馬琴は華山を盛んに紹介してある。越後の鈴木牧之に與ふる書中に『華山と申す唐繪かき倅(琴嶺) 同門にて事の外畫熱心の仁也、玄同放言にも右之仁の繪二丁加入仕り候、雪蟬も此仁にうつさせ候つもり、たのみおき申候、この仁へ畫をたのみ、ばせをの像は粟津義仲寺藏板、杉風が筆の肖像を繪せ申可哉と存じ候ひしが止め申候云々』
又『先々便貴兄御頼畫三幅之内一幅は畫を渡邊華山子へ頼み置候處倅轉宅一儀、並に八大傳著述にてさいそくも不仕候故出来不申、當月中旬より折々催促の文通仕候處彼人甚ながき人に未認申だん、催促いたし候へば一昨廿六日の夕がたやうやく認被差越候に付拙贊しるしつけ今般差申候、毎度申候如く華山と申す仁は俗名渡邊登と申、三宅備前守殿家老の子息にてたしか御近習を勤被申候、三宅は備後三郎高德が子孫と申事にて、藩朝譜並に武鑑にも系圖は高德より引有之候、右三宅氏の家臣の畫故、則備後三郎題詩句拜櫻樹圖を誂へ畫せ申候、高德は南朝の忠臣、關羽は蜀漢の忠臣なれば和漢の二幅對に可然哉と存候、右先達て唐紙へ認めうら打をいたさせ差越し被申候、紙の長短先頃關羽と出合不申候は、上の處よき程に御切除可被成古土佐の圖にて被畫候よし、この圖の穿鑿に大にほねを折候よしに御座候、いかゞ御意に叶可申哉難計奉存候御用立候は、本望の至に御座候、花山御主

人の先祖を圖し候故、奉_レ謹圖_一と落款いたされ候と見え申候、人物の向やうも關羽と向合候様にあつらへ申候、それを御覽可被下候
悴より十二分のうは手に御座候いは_レ悴などが筆は畫にては無之候この人古畫の目利執心にてちと_レ交易利潤にも拘り候故氣韻
高く畫もとかくひねりちらし素人好きは不仕と存候と。又馬琴が書いた著作室雜誌の中に華山の畫についてかいてある。

『五月六日琴嶺病痾漸々に危窮に及びしかば、いかで肖像を繪かして嫡孫等が成長の日に見せばやと思ふ程に、末後に至て清右衛門
が來にければ予その事をば色々手に手簡一通を書てこを翌日迄に麴町一丁目なる三宅備中守殿の家老・渡邊登へ届けよとてゆだね遣
しけるに清右衛門がものに紛れて八日のあした渡邊氏へ遣したり、九日の晡時に登來訪してきのふは貴翰を賜りて云々の義を命ぜ
られしかどもさりがたき主用ありき、けふも亦使者に出たるが便輿は外にとどめて來つとて手牌一折をもたらして琴嶺が病の安危
をば問はれしかば予答へて琴嶺はきのを朝五つ時に身まかり候ぬと告ぐるに登いたくうち驚き悼みて御亡骸はいかにと問ふ。昨夕
既に龕に歛められたれども納戸に在りといふに登點頭いて、苦しからずばしほし蓋をひらきてみせ賜はりてんやと云ふ、素より望む所
なれば折からまた來たる清右衛門に案内をさして納戸に伴ひて龕を開きて見するに登則筆硯を請求めて枯相を寫すこと一時ばかり
寫し果て出て予にいふやう枯相なれば肯るべくもあらすなれども體格は寫し得たり、異日畫稿ならば見せまつらんと辭しまかれ
り、抑々此渡邊生は初に畫を金陵に學び琴嶺と同門なりければ二十七八年の友なり、後に畫は一家をなして、肖像を寫すに必蘭法
により二面の鏡をもて照らし、その眞を寫すに肖ざるることなし、たゞ畫事のみならず、文字あり且剛毅の本性にて巽にある人の酒
宴席にて胸懷益にて多く酒を喫せしと聞えたり、さればこそ琴嶺が亡骸に手をかけてよくその枯相を寫したり、この擧は實に千金
なり、世に懇友はもつべかりきと思ふ、予が喜するべし、渡邊登名は華山古畫の鑑定をよくす、學力あり、見識ありて主君に登用
せらる、寛政中考妣の遠忌に畫像を作りて祀り奉らばやと思ひつゝ、北尾重政にあつらへてたび_レ畫かせたれども毫も知らぬ人
を畫く事なれば竟に肖たるものなかりき、肖像は必生前に畫せおくべき事ぞかし乙未六月七日記』とかいてある。

北尾重政の馬琴の肖像の成るに由る事

びりりたるが荒し馬琴が牧之_二文通_一に_レとく、
山が揮画も極あり_レ、雪譜ハ飛常の重きを
有_レに_レ、あ_レら_レう_レ、
六月四日記

○六月七の稀才後をも_レ、
協進を_レ、
所_レ、
情_レ、
慶_レ、
出_レ、
分_レ、

路のあり、彼ん人三三のあり
為り、浮世給に極せん、其路
を極せん、やうなことを考へたの
が、今と云うのは、詐欺の口説と見
え、いふもの。其路、朝日の記
者、まゝ、飛火か、し、社、ひ、其、人、の
能、い、その、ま、く、浮世給の、其、路
者、と、ま、り、その、ある、春、其、方、亦、も、ま、り、云
ふ、い、つ、海、り、え、命、し、比、名、せ、ま、ん、ま、人
ハ、い、ま、在、ら、ん、ん、不、七、仍、此、ハ、浮世
給、の、あり、い、ふ、限、り、他、に、其、路
七、交、つ、ま、り、い、けん、も、其、路、利、が、已

ういのむ何れも手出しをいふのころいふ、統向此等の
換えいあつくと云ふんをき、コシナ伊能のころいふ由を
行んせぬこといふか、ゆかからんをさうけ出す
際よりこんと云ふことが、母の川に八尋田遊まをまひ
れと云ふか、名ををいふ用、儀程こゝにの、惜あふまひ
あると云ふ後も出た。守田家母が佛法行者にあつた
ことが、あつた出た三村も怨まふであつたこと、あつた
者の許をもつた、寶舟の何う武取まると酒次心
も合掌すまふ、其然禱の詞、指頭か、後光か、神く
と云ふとき、時、歎微鏡じ其の後光と捨つた、観
音の形があつた、いと云ふてあつた。慶物のあつた、最
書をさせること、迷惑法七出たか、三村の法、も變

三村

舟の用印、不淨といふ三字を刺して、いふかあつた、
枚のゆえに、捨つるといふ、下が木を、大隈屋の印
を作る、あつた、一穀と大、家、誰の、後、難い
を、選、び、代、筆、の、二、字、を、刺、せ、し、め、ん、と、い、は、し、た、後、と
いふ、似、て、あ、つ、た、と、い、ふ、一、日、北、日、あ、つ、た、と、い、ふ、示、さ、ん、れ、い、ふ、の、
山、中、共、古、の、か、の、人、は、者、か、せ、れ、帳、面、三、冊、か、あ、つ、た、馬、山
大、柄、帳、と、似、つ、た、と、い、ふ、が、奉、加、帳、と、思、つ、て、あ、つ、た、花、り
の、ゆ、え、に、い、つ、つ、も、捨、つ、た、寺、々、の、寶、印、を、捨、つ、た、
い、ろ、く、の、人、の、捨、つ、た、が、あ、つ、た、と、い、ふ、七、執、心、と、あ、つ、た、
れ、と、い、ふ、の、り、
六月の記
○此一冊を何んで書かすれ、と云ふと、毎日、日、深、の、こ、と、
は、の、つ、花、法、を、投、す、べ、き、を、行、を、ん、つ、て、教、を、成

ついでに何時の田園生活「嬉」か「笑」漫漫漫、余の書
書に歴三編「早稲田」荒漫歩の内「校庭」と思物
館「大隈産の院」を記す。此種「^{新刊}」未定か
その他うら揮毫も記せん一日半を費し絹紙合せ
て三十枚を筆し一筆斯く多く書いたこと、及後
無の。此後から西洋の名著小説を讀みぬ。モリエ
の八回坊い「モ」パッサンの「ジョーン」と「ジャン」を讀
み、ジョーンとジャンは兄弟か、中ハ母が「哲夫」と信
じて出来た子か、その「哲夫」が死後遺言を「ジャン」
に遺したことから、兄が「謎」を抱き母が「苦悶」する家が
「^{新刊}」書のかんた、斯く例「^{新刊}」自分の「^{新刊}」家庭
にあること、特「^{新刊}」興味を以て讀過す。山口権日

山口権日

三ヶ月前、三十三回忌辰に際し、誠不承り、亡友を
井「^{新刊}」が臨終表氣筆し、其後を定りて来た。山口が
と余との往りの交誼が、此後の内、余の道徳談
も収めてあり、余の「^{新刊}」の「^{新刊}」余が「^{新刊}」の「^{新刊}」
熱海に在つた時、毎日の「^{新刊}」教書をしたが、別に「^{新刊}」後、
「^{新刊}」「^{新刊}」「^{新刊}」二十三年「^{新刊}」を「^{新刊}」
ふと何日の早く去つたのを感じて、惘然として、
又方振早大を訪れ、同書館の増築を一説し、
の建設に係る「^{新刊}」をも一説し、
「^{新刊}」を「^{新刊}」校庭の「^{新刊}」
つた。新刊「^{新刊}」校の「^{新刊}」
名今合す、善心物を「^{新刊}」

國古と隣りず城塞士の山は画冊本河原崎
の山嶽山は一幅と採り 六月十日の記

○昔一江戸時代より朝鮮から船が来りて彼の上へ元
翔一は今日見ることか出来ぬ朝鮮のどこへ行つた
る幸平が元よりいふは、越川原の古いといふ
る處より貴族の白川流と云ふ、此より一里七
年十月より開始され、此より一里七
全出する純情無臭の流と云ふ、空舟城とし三時
直し得る不化、此地より白河が考へ、中室と
常々田の中より降りる、此より一里七、宇垣
昔巡視の時、常々此の路の四の中より一里七
千羽鶴と云ふ、鶴と云ふは、此の鶴、親の世

思ふに、いふは、斯う祥地と云ふは、流き出る、名所地
を一掃名所と云ふ、いふは、水入、鶴の七、所とし、此の
いふは、

○伊藤公が韓國統治時、此の地は韓國皇帝の南地
行幸に扈從した時、公は、禮式官に、身許
七、此の群衆の中、伊藤公の首を欲し、いと、
るいふと、問ふと、見よ、と云ふ、ん、此を、
礼式官の、
公に、志し、此の、誰か、誰か、
公の、公の、
此の、
事、

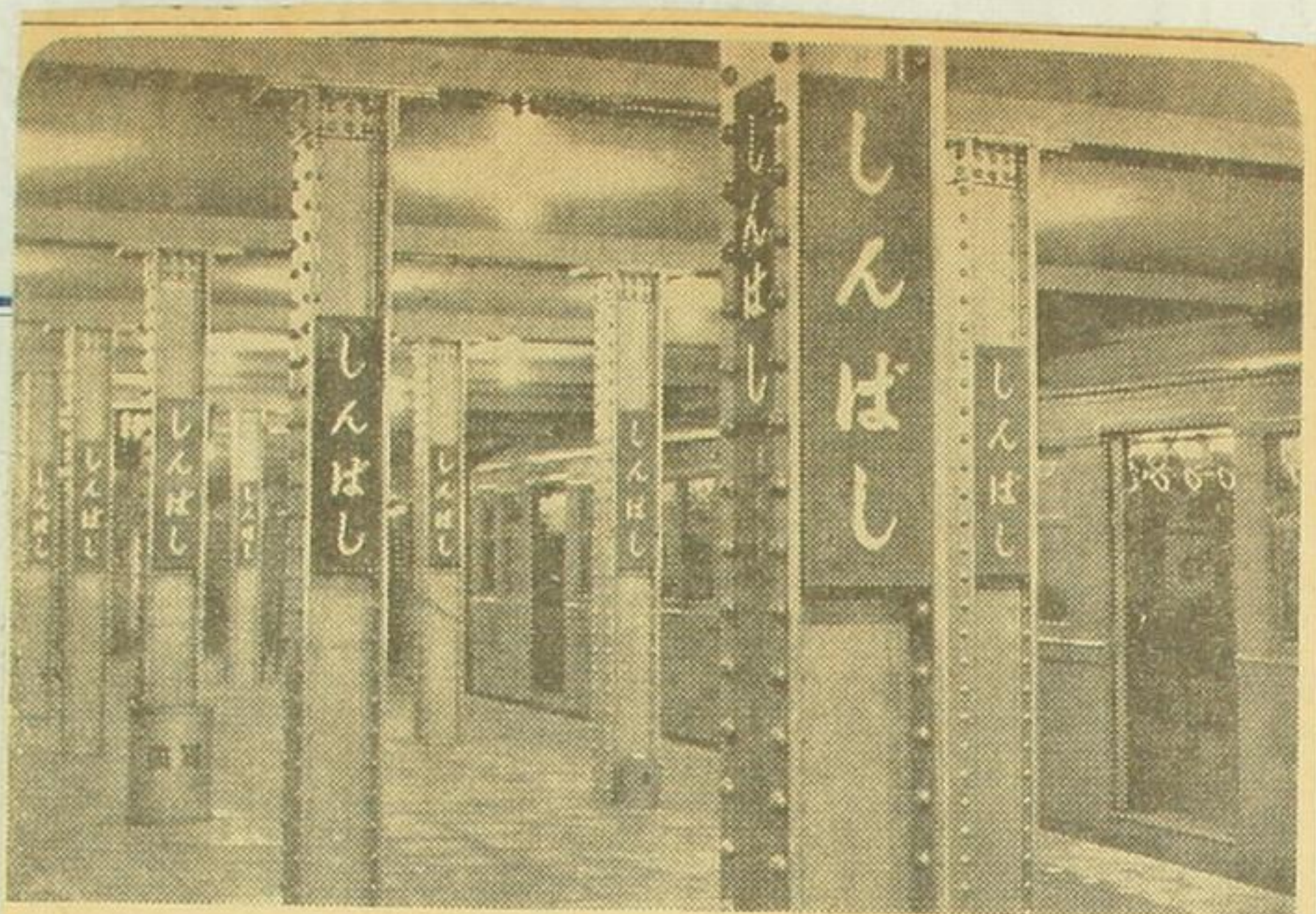
○此の頃の物語の挿入の時、出巻のよみがあつた、此の
年、頼朝の御時、世の仏法大師の書、其の現るゝもの、大師
の御時、佛の御時、やま、他、人、お、む、書、の、ん、て、あ、る、が
め、の、も、雲、流、の、筆、に、感、服、さ、せ、し、も、筆、者、の、木、村、武、山
の、相、宗、名、あ、つ、の、あ、る、人、に、か、佛、像、を、書、く、と、斯、の、千、腕、の、あ
つ、の、思、ひ、の、う、つ、つ、に、

○山、匠、の、書、の、時、に、來、し、て、軍、人、が、後、庭、に、硬、骨、の、形、を、紙
に、七、軍、人、の、模、範、を、写、す、と、い、ふ、書、を、収、め、し、め、る、が、先、以
の、海、合、の、變、問、の、形、式、を、書、き、を、論、し、し、よ、の、前、司、法、大
臣、の、海、合、の、千、冬、の、あ、つ、た、自、合、の、今、ま、の、其、東、記、を、道、後
を、書、し、し、の、比、か、今、ま、の、精、進、し、し、と、い、ふ、其、の、論、に、方、の、あ、る、と
も、徳、か、ひ、あ、る、が、あ、つ、つ、も、用、到、り、陸、軍、に、人、を、し、し、を、

陸軍

○此の二通り日課のやうに毎日大隈侯に随侍し、各所へ出
行し、其の事を書き録して今日一ト通し書き終つたるを
紙二十枚に及んば、有暇したるを、少くも、十枚に及
前大隈侯が、古、折、せ、ん、に、後、書、須、梅、流、を、知、り、し、し、
侯、に、聞、し、し、自、合、の、侯、流、を、書、き、録、し、し、あ、る、大、隈、侯、一、言
一、行、し、し、の、侯、の、御、行、流、も、収、め、し、し、あ、る、が、一、部、傳、へ、し、し、侯
の、天、之、記、り、を、書、い、し、し、又、た、い、と、思、ひ、ま、ち、に、い、し、し、一、言
一、行、し、し、を、卷、取、り、し、し、記、帳、も、出、し、し、書、い、し、し、又、た、い、と、思、ひ、ま、ち
の、一、面、を、知、り、し、し、文、献、し、し、あ、る、が、ど、の、旅、流、も、出、す、と、定
つ、の、あ、る、が、隨、筆、早、稿、田、と、い、ふ、書、を、出、し、し、と、思、ひ、

○此の二通り日課のやうに毎日大隈侯に随侍し、各所へ出
行し、其の事を書き録して今日一ト通し書き終つたるを
紙二十枚に及んば、有暇したるを、少くも、十枚に及
前大隈侯が、古、折、せ、ん、に、後、書、須、梅、流、を、知、り、し、し、
侯、に、聞、し、し、自、合、の、侯、流、を、書、き、録、し、し、あ、る、大、隈、侯、一、言
一、行、し、し、の、侯、の、御、行、流、も、収、め、し、し、あ、る、が、一、部、傳、へ、し、し、侯
の、天、之、記、り、を、書、い、し、し、又、た、い、と、思、ひ、ま、ち、に、い、し、し、一、言
一、行、し、し、を、卷、取、り、し、し、記、帳、も、出、し、し、書、い、し、し、又、た、い、と、思、ひ、ま、ち
の、一、面、を、知、り、し、し、文、献、し、し、あ、る、が、ど、の、旅、流、も、出、す、と、定
つ、の、あ、る、が、隨、筆、早、稿、田、と、い、ふ、書、を、出、し、し、と、思、ひ、



新橋開通記念

新橋 ← 浅草間

16分

速くて安全な 地下鉄

浅草

新橋

新橋 ↓ 浅草

地下鉄、けふから開通

地下鉄がとうとう新橋まで開通し、
 た—全長八キロメートル(五・三〇マイル)、尾張町—新橋間は八百メートル、大正十四年九月淺草南に第一駅のホームを打ち下してから八年九月、八坂區に分けた第一期工事がいよいよゴールに入つてけふ廿一日の初夜から開業し二分毎に淺草に向つて發

車する、市電で四十分が僅々十六分にスピードアップされる

淺草から新橋へと一口にはいふが三千二百萬圓の巨費と延人員千五百萬人の手で掘り上げ、百五十人の犠死者を出してゐる、工事はこゝろ邊で一服、やがてまた第二期工事虎の門と品川へ手を伸ばしてゆくといふ(寫眞は新橋驛)

植木君が貯金を横領せんけりを横取ると自殺したと云ふ
 ハ倚てその横領は二年の間本銀協会の支店長に成り上り
 い大家の亡びんとする末路を思ふと悲哀の情に成り上り
 六月二十日

○日本は海國であらば塩の事を缺かぬ、海水を引く汲み
 と亦も塩を産する。鹽の産地も其すこと他國よ
 りも甚しい。自今迄の日本の産塩も今日より漸く産
 量を用いてゐる。皆塩が別を磨いて塩合が其
 ありともある。聊か鹽を産して運ぶ者が目下
 亦て眼病患ふに苦つた。其の實は鹽水が云ふ
 あり。海水が成るより行いんとする。鹽合が人体と
 成る。其の成りから未だあり。浴槽に鹽を入ると

日本は海國
たから塩を
かこさるる
三三三
佛一使を
戒し思ふ
例は多し

湯と化さるる同に習慣である。飲食の内を缺き塩分の
の無いと云ふ困ること無へ。用者肉利の福の者其の
必も焼塩を焚き世やした。飯にありても佛對し副食物
の無の時焼塩を食せざるのよと云ふ。握り飯は塩をつけ
ること副食物の代りである。塩が飲食物に必要である
から、神佛に對しけむと云ふ。塩断を指すことある
よ、忍苦を表すものがある。此の目断塩の種を古くは
得ることある、多くの類あること限つてある。醫家の
説は塩分は神性と眞の養と云ふこと云ひ或は性慾を敷
舞も守らん男の用者も知んる。日本は清淨を喜
ぶ留俗であるから、肉織を拂ふる、何事なり塩は大切と

鹽

潮干やり
法は俗

海邊に行は
る所の塩氣
が滅する

塩の料理
醬油味噌

さへ不潔の人のおはあといひ塩をまき、或は器具補度をも
塩で磨くこととある。葬式の帰り家の入り口は先んち
塩を振りかけしめる、こんどは穢邪氣を拂ふ不浄を
拂ふ先んちと云ふ迷信も昔傳つてあるからいふ。舟船が土
俵の上は仕切の毎に塩をまき、舟の縁起を破らざるに
し、料理の入口は塩をまき、塩を置くの古くは
が、日本の地方は依りて塩分を必要とする味好ましくは
ある。山間が海産を缺く事あるに、塩分の魚類を食
ふより外に、塩分の多いものを喰ひ慣れたることか
に、塩を得るに、塩分は、海魚も入るものがある、
大体都府の人の海産の塩分を厭い、地方人は其の味を
か、新者の如き少量の副食物に、飯と喫する、

英國エドワード第六世の時或る一人息子が死んだが此息
 子の母も子も皆死んで一人の母親があつた。家か此息
 子の跡を母が代行すべきや否やと云ふ事云ふ
 小國羅マ教裁判があつた。此裁判は此息子の
 母の母身体から生れたが血縁の事いふ事ある
 と云ふ事か言ひ流されたとの事である。此時分
 レウエニホーフと云ふ研究家が其方を其人の
 ハムカス人の遺品の精液と持つて来たのを其人を
 顕微鏡で見れば愛浮山の蜘蛛の似れよ大派
 いて母ののを見て、んことを人の子供じあると思ひ
 神が入る人間の子供の母の体内に居る、男の体
 内にあると云ふ此其説の、新発見と云ふは子供に

新発見

父から出来たものであると思つたからである。生殖細胞
 や受精の事實をいふ事いふ、今日の海軍家々之ん
 二類は間違つた事をいふ事と云ふ事もあつた。然るに當
 時に斯様な間違つた裁判を受けるともあつた
 の事である

○按浮精一の在世中裸体藝術史を著すべく懸念
 憑つたことかあつたが、其事も念ふ事ある事ある事ある事ある
 ハ裸体藝術の事一節し自分も亦し理あるか否か下すま
 事あ抱いてゐる。然るに一々して是れをいふ。此頃向は
 かけて大回三節、若し裸体の習俗と云ふ事藝術の一書
 を著す、大明も亦し解し得た。此其の事の新書の人
 け、書と云ふ方面の事と云ふ事。此方面の傳説其化

二の可き長めのこしもあるが、笑談として扱われ、
七巻、亦その自説と併せ、七巻ある以下裸体藝術
に關する項の此書三條の二、三が、一つは原文に從つてあ
るいり者筆の考めである。

一 羅馬がアケカン法皇宮の礼拝をうろ駁しい男女の
裸体畫の描かれたるものゝまゝ、カ迪安をまげること
かゝる法皇がオノ四世の寺院の神事と清けの
こととでニール、グレン、ヤオ、ンニラに禪形のおりく
る神の帯ハリー、のれ、後法皇ビイ十一世の西に
ハ、思演かあるを、并に禪を陰印として、カニ
ルは、こゝも、後世神のまきの醜名と傳へる。

源氏物語

一 西班牙の南端セヴラ市を造つたカカール、
殿の浴場には、あま、こゝに就て傳説のあるもの、
一四五〇年、ル、グリエルの寵姫マリヤ、ド、パ、
ラ夫人が、常々浴したるに、寵姫ハ浴をす
時、その儀礼も、古甲のまゝ、その貴公子や、
人たるが、浴場の何候と、ぬる、夫人が、
浴槽から、出ると、時、列座したる、
ハ、皆、跪いて、凝視を、洗つた、
その、
風俗の、
つた、
、

いしやうなるスリーブを味ひまうたからさらなる中味(肉)
はまゝの食慾をかけるやうにする。ハローのわいせつを
權んまうたのわいせつとまうた。

○洋風の日本の裸体畫の歴史は遠いことだが日本の裸
体は平安朝よりといふ上代から相撲もある。海濱
の裸体の風景画的な婦人もある。田舎に行けば夏
時若婦人も裸体で乳房を露わしてゐる。洗滌に
行けば裸女が三四人から垢を摺つてゐる。裸体は日
本の習俗であるといふへ、昔は女は裸でまうた。裸体を
えうといふが少くもいふ。殊に神事、古來裸体
習俗も裸体祭が今も行はれてゐる。俗画に於



ては春意を別として浮世俗に花を以て婦人入浴の
習俗を初めとして所謂アゲテ給を以て局部裸体
の圖である。また古來裸体は決して珍らしくない
のであるが洋式裸体畫は對しては不思議な公判
を呈したといふ。國民之交の蜘蛛とてふ山田貞
治の小説に裸婦がみちよこさつてゐる圖を出し
てゐる。又浮世の是の説がある。里田清輔の報
載と題して婦人の背圖を画したるを婦人會の
出た。また九鬼隆一男の衆議を擡つて陳列を許し
た。この見出しは九鬼の自白に據
ると西洋の裸体畫を藝術と見做してゐる。

これを日本に死せしむるに於て他は一回交際を降しを生
きたといふ単純な見解で兵つに思ひをうつたの如
明治九年の頃工部省の美術学校に洋畫を學ばせし
頃の女性のモデルは絶對に得ることが出来ず男性は
誰人もモデルに當ることを得ずしむるに於て学校の
爲人達を説き諭してモデルに供せしむるに於て女性に就
てはヤツトの多き拔附の爲家の娘を誘ひ来り
着衣のまゝ寫しに任せることであつた。この頃彫刻
神一夫は海をトキ身裸體として石膏型を取つた
のが稀な事と云へんが其の後洋畫家の家塾
でもモデルを得ることの困難を感じ、自由者
勵志の類と逢ふに據るに連入帰つたり、實を云

明治九年

の女性や紙屑等とモデルにせしむるに於て女性
を得たのは殊に難儀で、襦袢と纏つたやうな若い
女性の衣服を解くことか容易むらう、衣類に
けしきを付し物を其くせしめて此等の苦を取つて僅か
く得たを得たと云ふのも、追々モデル世を世法する
お婆が出で、モデルは女と云ふに於て是れ等が供給し
た女性の多くは皆容不直のものであつた。モデルに
ハ其弱のよのひあつた。日本の裸體画史より如ゆき
困難の事があるに如く、今、臨時的に自家とモデ
ルとして提供する女性が多きものも出て来た。此
時勢の變遷も七長七短いろいろある。
のギョウリの美術史の中よりおもしろいことか述べ

ある。當時有名なる術家がアフロディテイト女神像を心
りヌビデンを運ぶに苦心し、美の多しおのめのため
のル、ブラクジテーンがふと運んじ、テルはフイリ子と云
ふ。おのめ、んがあらわす身体各部に申合なき美と貴
さが備わつてゐる。其の裸身像ハアフロディテイト女神と
して名前のよかあら、後めいさ美顔と嫉みんて其
根から清神罪を許へん。以時、赤蓮人の極力無罪
を主張し、其甲斐ある。重目の刑を宣告せんと
し、此神那赤蓮人のフイリ子の掩ふておれ、衣像を
切斷し、全裸体の姿を法廷にあらわし、れり、刑を
ぬり、法廷にあらわして、極致せんが、法廷に、徐
ろに起つて、このふりの美しいものを尊敬する人

神

や、神のよきと尊敬する。も、以てあると云ふて
無罪と云ふ。流した。ホ、ブラクジテーン、方、ぬ、巨匠
ヌ、ア、パス、カ、ア、フロ、ディ、テ、イト、女神、を、厄、り、ヌ、ビ、デ、ン、と、し、て
おのめ、ライ、ス、を、運、ん、だ。この、女、子、像、と、共、に、有、名、の、こ、よ、と
する、れ、が、こ、の、ア、ラ、ト、ン、の、門、下、ニ、キ、セ、ノ、ク、ラ、イト、と、云、ふ
哲、学、者、が、あ、り、て、後、め、の、美、の、全、く、無、関、心、と、あ、り、
た。ライ、ス、の、高、い、矜、持、は、俺、ん、と、魅、せ、ん、と、い、ふ、お、の、め、
は、か、と、ニ、三、の、人、と、賭、を、や、つ、て、一、夜、深、く、作、つ、り、亮、賊
の、方、め、進、い、ん、だ、と、云、ふ、口、實、が、哲、学、者、の、門、を、叩、き、既
ニ、扉、が、開、く、と、あ、つ、た。哲、学、者、は、驚、き、あ、ら、わ、る。媚、態、を、
演、じ、誘、惑、を、ぬ、か、め、た、が、お、の、め、の、無、駄、い、あ、つ、た。お、の、め、の、こ、
賭、を、一、に、お、手、を、取、り、お、の、め、の、人、何、れ、と、問、ふ、と、

元中と云ふのが木偶の動かし云のうらと云ふれと
ある。當時著書にミロンも此のライヌとミゲルとを記す
る。ミロンと云ふのは、ミロンは老境の著書に於て、
志に因へて志をやりしを記す。ライヌは、
よく記してある。ミロンは花の事、今自分の面影の故に
あつた。魅や、深め、後め、後め、後め、後め、
か、先め、後め、お、お、お、お、お、お、お、お、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
希跡の著書、術史、一エ、ホ、ウ、も、心、つ、
の世の杖、術、術、術、術、術、術、術、術、
の、後、水、島、記、の、文、化、十、二、年、一、江、戸、の、北、郊、を、任、事、中、六、
の、隠、宅、を、酒、合、歌、と、う、う、記、也、此、次、文、一、か、卷

酒合歌

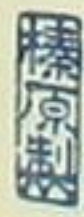
首、酒、歌、の、回、を、か、き、蜀、山、人、が、何、者、を、あ、き、り、
一、卷、と、稱、す、其、序、に、二、十、九、お、蜀、山、人、細、末、橋、
上、に、あ、り、ま、す、と、あ、り、昔、一、書、を、あ、き、り、大、河、河、原、
松、之、屋、深、松、次、の、酒、歌、を、あ、き、り、と、あ、り、と、ん、が、前、
の、島、記、の、後、の、島、記、也、並、録、に、左、の、如、し、
江、島、至、五、合、入、
島、合、至、七、合、入、
若、壽、島、至、三、合、入、
丹、行、至、三、合、入、
勝、富、抱、一、文、尾、七、三、合、たり、と、記、中、に、ま、あ、り、酒、家、
の、築、中、に、此、島、與、る、べ、し、と、終、に、據、い、入、り、明、本、に、
六、月、廿、六、日、也、
此、日、文、行、を、記、し、林、若、村、の、序、に、二、本、と、稱、す、價、亦、

けんも長く病臥の口人に節し持置の買物こ、俾けり
孫とてしるす

一 西國船大右船印 代付

此書見録丁丑早相授大右衛門の刊
所より美濃府毎紙三紙と書し上あり
紙封を解し下二紙の船と印を解す書
後竹田中川因幡守の船印に十字架の
あり江表とて一頭等軒流宣の
あり書名を日本回道大全とあり分
ハ得りめからざる書也

一 天永二年 朝鮮郵使來朝圖



六枚の取書を造り合ひて一巻に造り
しるす其書者七年月七日刻しあると
んも美川師宣の書と推定するべき
こより、鮮人の面顔日本人の相共の河
宣の筆致羅如く、朝鮮郵使行刺
の圖取れ孫とてしるす是らてんも此圖取
ハ極めし稀也

一 淡河橋通枝自景茶海家酒蔵合

こんハ林の花本とありが、今チキ陳列の枝
料とて観んに猶や、こんハ折本とて一月の
物を取し、四月廿年、川人の深しと西

心を病めしむるに過ぎぬ。無枝より、昔昔
ニ無枝の序あり

信子玉公は、人の短を言ふこと
まじくと申す。しかば、信子玉公は、
家連中、今や開化のお世に、
習志を富橋那公并と借、合利井出
れども、西夜、うしろ、大無名の店
部、この春、奥の信子の、物見下
り、軒の格、夕まで、誰か、
の夜、消やら、女の任、
の事、ふれ、利、
今、信子玉公の、
三、



お茶、
誤、
羽子の乙女、
子の、
忘、
無、
身、
後、

○裸體畫の、
か、
を、
る、

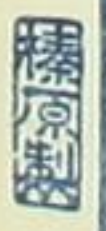
りまを除去するつれもあるが遂に全裸となり終つたことき
も同一風潮の然るにめれよむい世態の本能と副いん
この藝術家の努力から裸体美と最上の美と云いつ
るかも知るべきなり

○女人の乳房とぬらよびより突起が美と云ふのも、
必竟の人類生育の靈液を生ずるところの宗女親
念から崇拜せざる美もさういふにあらう。原始的
代の乳房も不思議なるものと思ふも男女の生殖無
と共に崇拜せしむる宗女親の的とするに石像が性々
あるが、乳房の隆起がいづくエキヤセシートと云
ふのである。同時の陰部も三角形の突起が標示せん
てゐる。西洋の古同様の乳房のてまよりの像がある

西澤

ウ井口十市の寺にありて同様の女が魚に乳を吸はせし
もの本が描かれしもある。ラフエーの女の同様の乳房
は乳房形とありのエルセツトがはめぬである。ウアテカ
ン孤星もそこあるのがきんた。四維馬の美術師は、
もあつた女人像より無数の乳房が無人下かつてゐる、
『千年祝言』と曰ふ抄とよむ。その女を始の女人
かか乳と乳を合するやもあつた。袖冷むる名畫が少くも
ある。聖母の乳と出つてゐる。同様の乳と出つてゐる。原始時代
の乳房も崇拜せしめられたるものがある。いかに、
意に比倫の多のいかに聖母も敬ぶたものであらう。西洋
の神話もある好まざる子が母の乳房を舐めつたのが
母が天上に上りて子を投げた後と乳汁は逆り

出づ天の一角を白くしは美か天の海に地三滴り後ちれ
のかわ合と化しれらむのこめ、肉体美を誇示しは時
代にせい豊満の乳房を誇りて互いに競べ合とせしこと
い前掲げは斯の競るが起るは自然一服時やも度
化かあつて、乳の隆起を一層高くせしむるは乳房
を捲ふおねの入りしと綿も入れたりしは、亦乳房を
堅強せしむる為めとせしもの工爪せしと云いんてあふ
西洋にある愛徳性熱するもの関係から乳房を扶
らん死しは女が乳房の守護神として祀え、乳
の乏しいもの新乳の増えを乳房形の種子の供物を献
すとすあか、日本も乳房の守護神として祀へしあり
て、乳に納める俗馬鹿と云ふ女が乳房を二枚の圓



や乳けの通り出つる圓のあつたものと同様の話がある。
○日本に神佛と云ふは清浄と輪の淫猥を忌むことな
らうとあるが、ももん神道や佛敎のいふ戒めは、操の
いふとこむとせしむるは、思ふに大なる同趣に、古く時
代のバビロンヤエリント港をたづむる神祠に女二即ち
あつた。ユリコトの神祠に奉仕り娼婦の二千人と称さ
れ、羊んが春行ををたずまは淫を帯いた所得の二半
と神祠に捧げられたもの、神祠もももんも、あま男一娼婦
も春をを得たももんも、ももんも、娼婦の奉仕し
娼婦かももんも起長ししこととせしむるの、実からま
系口ねもあつたこととせしむる。バビロンの紀元前五世紀頃
の、雲々の見たり、一ふみりりの神廟へ、女を祀りて異

國の男、身を任せらるるに、貴族の別を
く思ふ事、んが、男、或、女、の、身、を、女、の、膝、の上、
に、置、か、れ、る、の、神、初、の、所、得、と、言、ふ、の、也。容貌、の、美、さ、
女、も、容、易、と、言、ふ、の、事、か、り、の、事、か、り、の、事、か、り、の、事、
が、解、れ、る、が、二、三、月、の、冬、死、を、由、義、と、言、ふ、と、言、
能、婦、の、相、手、が、容、易、と、言、ふ、の、事、か、り、の、事、
事、の、婦、人、に、言、ふ、の、事、か、り、の、事、か、り、の、事、
人、に、後、も、志、願、し、て、行、く、や、う、の、有、夫、の、婦、人、と、言、
夫、に、是、に、異、議、を、言、ふ、の、事、か、り、の、事、
事、實、と、言、ふ、と、言、ふ、の、事、か、り、の、事、
の、神、の、ア、フ、ロ、テ、ット、と、言、ふ、の、事、
の、神、の、ア、フ、ロ、テ、ット、と、言、ふ、の、事、
の、神、の、ア、フ、ロ、テ、ット、と、言、ふ、の、事、

神代卷

大、地、の、神、と、云、ふ、の、事、
ら、赤、婦、の、宗、教、の、事、
ア、フ、ロ、テ、ット、宗、の、教、義、と、言、ふ、の、事、
婦、の、宗、教、の、事、
を、仰、て、死、を、祈、る、の、事、
と、言、ふ、の、事、
社、の、前、に、言、ふ、の、事、
の、事、
先、に、言、ふ、の、事、
の、事、
と、言、ふ、の、事、

神代卷

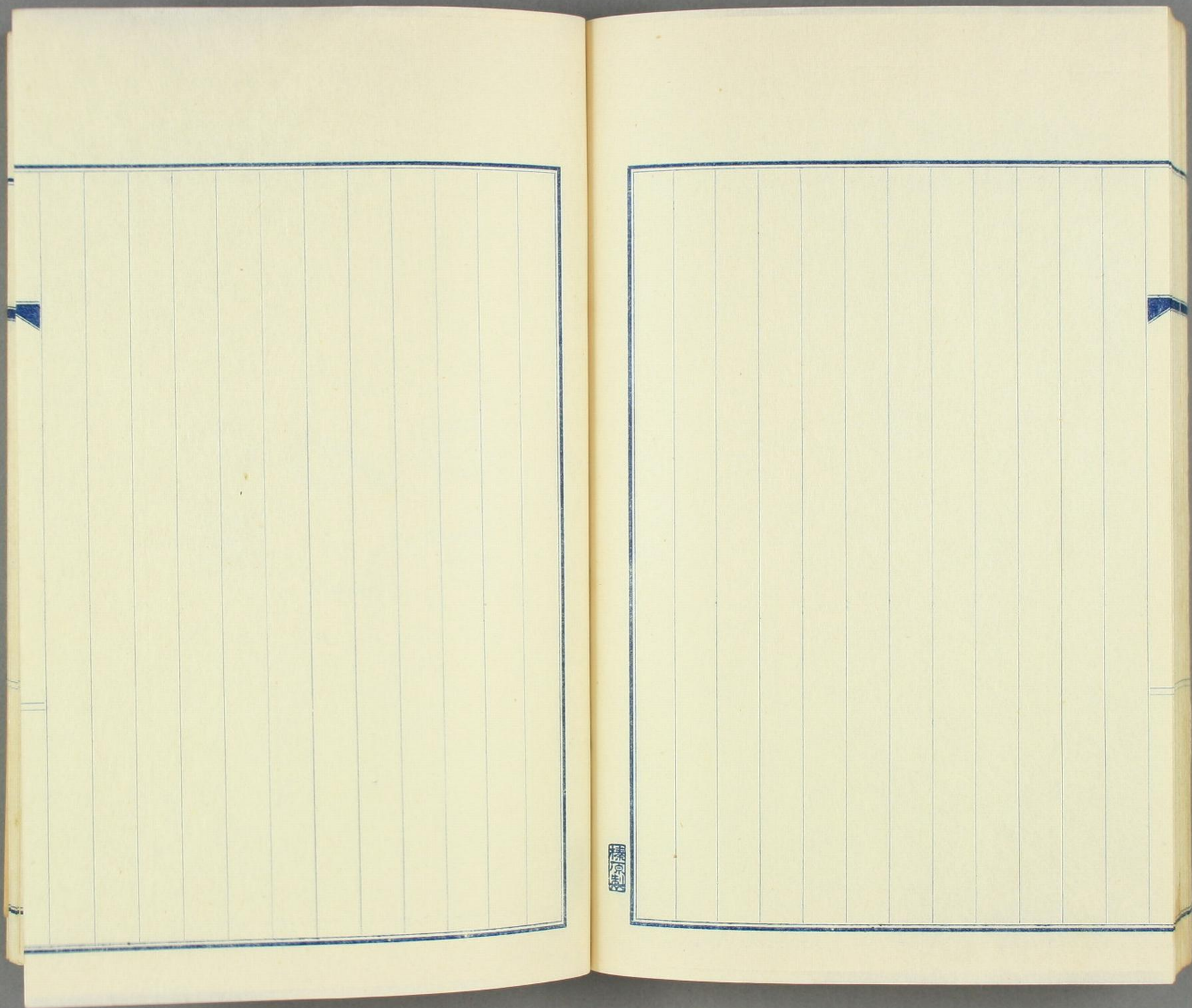
多しを怪しむるに違ふ。耶蘇教の尼寺、掲げし邪
惡の像、婦人好、而顔、僧侶のそと、木の聖母の像
ハ男子好、容貌、此畫の如く、女と云ふも、是も
性惡の本態を満す、世をせざる外、さういふいふ
女人を近の次を、高麗山に入ることを許さう、此佛者
戒とい、若し、の例、お坐すこと、あて、遠い、か、佛者、ハ、世界
教の、法禁、を、看、有、み、も、是、戒、を、主、に、と、の、と、見、る、ま、い
あ、ら、う、か、我、邦、人、ハ、外、回、と、交、は、ら、ま、い、前、ハ、外、人、と、夫、秋、と
味、ハ、念、無、歡、ひ、あ、ら、か、ん、思、ひ、あ、て、侮、蔑、し、比、か、勿、論、其、比
以上のこと、ま、い、事實、を、知、る、由、も、さ、う、い、う、た、い、最、高、時、の
人、ハ、エ、ン、テ、事、が、あ、ら、な、い、と、あ、ら、か、ん、思、ひ、あ、て、侮、蔑、し、る、信、七
い、比、か、あ、ら、う、日本、ハ、幸、う、し、て、爪、爪、の、よ、い、國、柄、が、あ、る



ことを悔うこと、は、な、ら、ず、あ、ら、な、い、と、い、ふ、ま、い、感、も、る。

日本をいび、一寸理解し、あ、ら、な、い、の、神、像、を、比、つ、た、お
女、と、い、う、と、モ、デ、ン、と、し、て、こ、の、ま、い、ま、い、の、ま、い、あ、ら、な、い、
顔、ハ、其、の、形、に、年、取、の、不、が、あ、ら、な、い、と、い、ふ、あ、ら、な、い、
こ、の、ま、い、思、ひ、あ、ら、な、い、か、元、來、希、跡、の、神、ハ、人、間、と、い、ふ、
が、決、し、人、間、と、比、擬、し、た、ま、い、と、い、ふ、は、な、ら、ず、人、間、に
卑、しい、根、性、が、あ、ら、な、い、神、も、其、根、性、が、さ、う、と、い、ふ、ま、い、
シ、テ、の、グ、リ、バ、ロ、ス、の、ア、ン、テ、ミ、ス、女、神、像、ハ、廟、内、に、
信、者、が、入、つ、て、奉、り、時、の、初、悲、し、げ、な、悲、愴、を、
せ、り、又、其、の、位、仰、と、恐、怖、と、を、暖、り、献、け、ら、れ、る、供
お、り、是、も、た、い、や、か、く、愉、悅、の、風、貌、を、有、ら、な、い、と、い、
へ、ん、市、人、と、何、等、か、の、比、所、が、あ、ら、な、い、か、市、井

のめやおめをモデルとしてからとてふて不思議の
いふが、云のし日氣を術家のいじんの怪かぬぬをモデ
ルとするのむよるむけこそえうべとこふだ、あま偽泥
まじりマリオンといふ彫刻家の、自心の女人裸
像に恍惚とていふのやうな思慕の情をかり
た所、其の執情の像を通しん形まぬん大現石
の顔面が江湖にたるとの致法もある。



Small vertical stamp or mark on the left page.

以下
6丁
白紙

空の憧れ三千年

歐米より早く 奇想を現實へ

百五十年前に人力飛行機 輝くわが航空史完成

【静岡発】空を飛ぶ——これは人間發生以來のあこがれかも知れない、そのあこがれを實現した飛行機の發達も大したものだが、この發明は近々一世紀以内のことで、實用化されたのは僅に二、三十年である。「空へのあこがれ」は遠くギリシャ、ローマ時代の詩歌、繪畫、彫刻にさへ現れてゐるし、わが國でも神代からあつた、しかもこの航空思想の發達は西歐よりも早く具體的飛行機の發明におよんだといふ事實がある、これを文獻によつて闡明し、これによつてもわが航空思想が西歐のそれに比し考らざるのみか寧ろ優秀なることを立證せんとする研究が完成に近づいてゐる。

この大きな企てに手を染めた人は、現在静岡縣佐、陸軍歩兵大佐竹内正虎氏（○）でその數年來の研究の結晶は近く「わが國航空思想の推後——飛行の祖浮田幸吉」の二冊となり世に公けられ、書集の文獻は國語館へ寄贈される筈である。

● **世界** ● 空史上におけるわが航空史の地位を明かにしたもので、わが國三千年來の航空思想は空想から理想となり、理想から現實へ——遂に百五十年前の天明五年六月、岡山の人、浮田幸吉により我國の飛行の祖ケレーより廿四年前、ドイツのリエンタールより百一十年前、米國ライト兄弟の飛行より實に百八十年前に最初的人力飛行機が發明されて實際に成功したことを各種の文獻により實證してゐる、さらに源平時代に大風を用ひて飛ぶ。

● **偵察** ● した記録、衆による飛行思想ならびに實際、さかのぼつては天女、天狗、仙術、神、夢、夢などに見られた飛行思想を古事記、日本書紀、萬葉集、太平記、保元物語、竹取物語、源平盛衰記、十訓抄、馬琴の小説その他各地の古い實説や傳説等によつて擧げ、その源流に現れたものとして、今昔物語の「久米仙人」、源田治家や源頼朝などの浮世物語など。

● **蒐集** ● 文化史的にも興味あるものである、また「飛行の祖浮田幸吉」は今日まで一般に傳説として傳へられた岡山の表具師幸吉の事蹟を、はじめて具體的に研究し、その飛行實際に成功したのは天明五年六月と推定し

の岡山における飛行機、世の迫害を受け行方不明となつたと傳へられるが、事實は清國放浪の末、ひそかに駿府（静岡）に移り住み、備後と改名して同地で著名な時計師、入道師として一生を費つたことを傳へてゐる、この傳記が國語館へ寄贈されてゐる。

● **現存** ● するところなど、忘れられんとしたわが飛行機の祖浮田幸吉の事蹟を明らかにしたものである、竹内大佐はわが民族のその独自の精神文化により外國の模倣のみならず、それに先だつて獨創せんとした歴史を順次明らかに

にし、わが民族がいかに優秀な精神文化を持つてゐたかをその思想的萌芽より立證したものである。

● **豊かな想像力** ● 竹内大佐談 竹内正虎氏は南滿洲五縣隊長としてシベリア事變の際に出征、勲功を著し、大佐に昇進し、戦後、文藝方面に活動し、文藝家として活躍し、父故正軍中將は軍政家として知られた人でやはり想像力の人であつた。

● **事故に善慮** ● 沈著な 驅逐 事故に善慮 沈著な 驅逐

は動力飛行機が發明されてからのことはよく訓べられてゐるが、その以前は外國でも、日本でも余りよく訓べられてゐないのでそれを調べてみた、昔から文人とか思想家の自由奔放な想像力で描かれてゐたことが後に合理化されたもので、これらの先覺思想家の想像力には敬意を表さなければならぬ、私の研究により先覺者の努力が世に明らかになり、時節が國民精神の作興に幾分でも役立てば幸ひと思ひます。

● **アメリカ獨立祭** ● 放送 局で に日米交換放送 局で は来る四日のアメリカ獨立祭を祝

描く空の夢



左上下竹内正虎大佐の肖像、左下、静岡市上大工町福泉寺にある備考書幸吉の墓、右上下、江戸時代の繪巻、浮田幸吉の飛行をうつしたものといふ、右上下、寛政五年版鳥羽藩三國志にある幸吉の圖



三河密 羽川社 春海 備考書 備考書

學園漫歩 市嶋春城



はしがき

都の西北早稲田の森に人物陶冶の學府が教育界の權威として仰がれてゐるのは久しいことだが、今日建築美を以つても誇り得る盛域に達した。不如意時代には臨時必要に應じアット、ランドムに木造の建物が出来て、統制は全然無つたのであるが、それが整理されて新舊諸建築が井然となつたのは既に十數年の既往に屬する。爾來舊建築の漸やく朽廢に屬するものは、追々堅牢の新築と取換へられ大震災以後建築又建築で代謝は實に目まぐるしい程頻繁で、昨年からは今年にかけて、事務所の新築が成り、文科の講堂が改築され、本年政法講堂が新築され、圖書館の増築が成り、武道館が起り、今は舊建物は一掃され、學苑の面目は全く一新して、久方振學校に訪ひ來る校友連は餘りの變化に驚駭し、茫然自失するやうな仕末である。右様な次第で早稲田大學は創立僅かに五十數年を経たに過ぎないけれ

ども、建築物中には既に歴史中のものとなつて、其の創設當時を追懐すると、今の學生達に耳新らしく感ずるやうな事も少なくない。學報記者は此頃自分に需むるに、大隈會館の追憶談を以てせられたが、考へて見ると會館のみならず、追憶すべきものが學苑にまだ幾多あるかに思はれた。依つて自分より提議し、少しく範圍を廣るめて學苑名區の追憶談を連載することとなつた。自分は先づ大隈會館恩賜館外一二の追憶を試みるが、追々種々の人に依つて書かれたら、自然早稲田大學校史の資料ともなるであらう。

大隈會館(上)

學苑名區の内第一に指を屈すべきは大隈會館であらう。大隈老侯が最後まで住はれた邸宅は此處で、立派な史蹟である。世界の道が早稲田に通じたのも此の邸宅があつたからである。こゝに維新の元勳大隈侯が、八十數年の長い歲月談論風發、一世を警醒したのも、

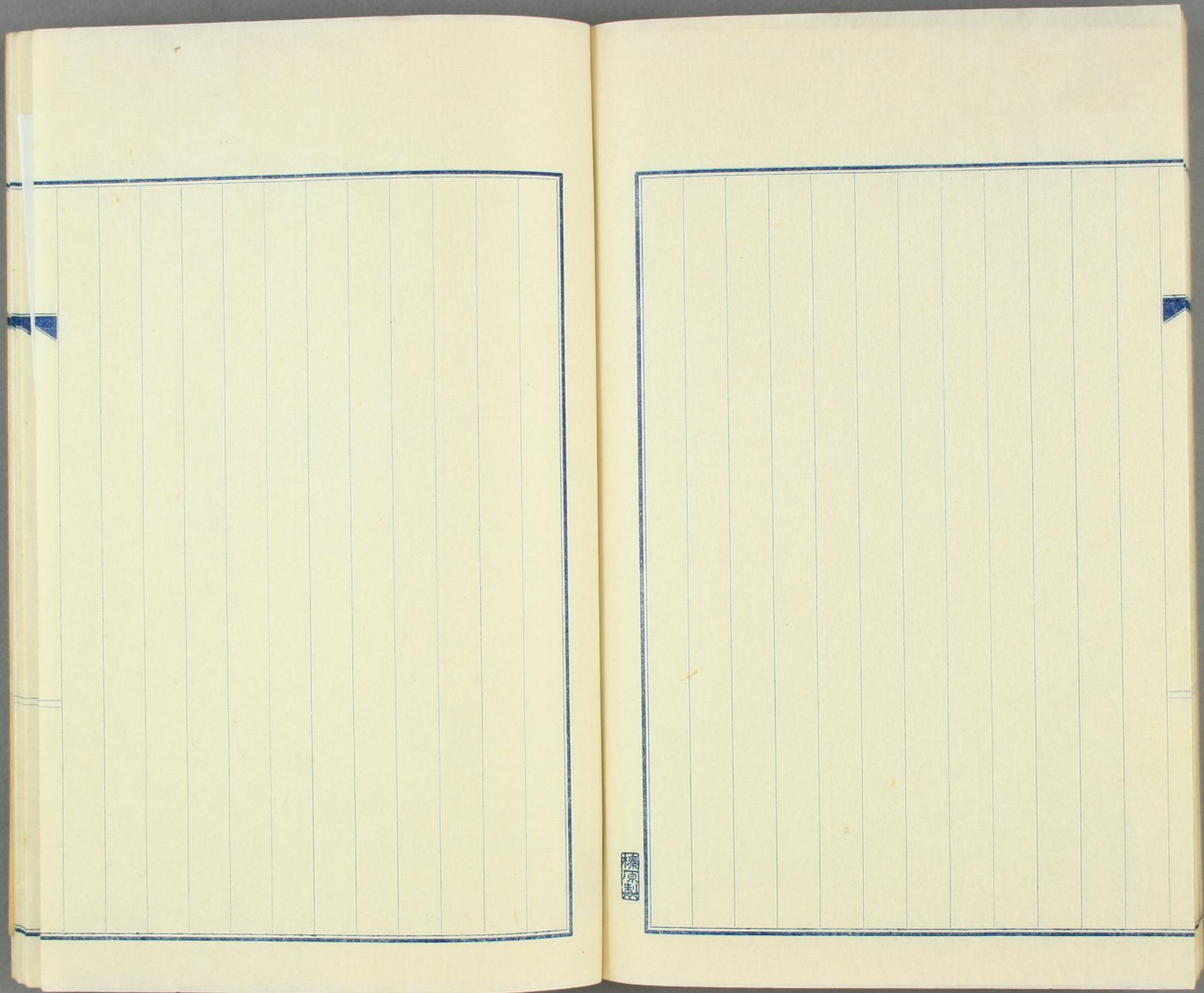
曾ては先帝の東宮に在らせらるる時台臨を賜つたのも、對獨宣戰の内閣會議が開かれたのも皆此邸宅である。侯の居常坐臥の室も、侯の訪客を延見された書齋も、皆儼然在ませる時の如く其儘に存して居り、侯の居室の隣室には道難負傷の際の慘憺たる記念物が置かれてある。各室の調度、庭園の一樹一石に至るまで、故侯を偲ぶものならざるはなく、吾等日々此邸に伺候した者は、何物を見ても深い感慨に打たれて堪へ難い心地がする。これは國家の一史蹟であるが、侯の遺旨により最も縁故の深い早稲田大學に寄附せられ、永久に守護し保存することとなつたのは、無上の仕合と云ふべきで、此の史蹟を永久に保護するは早稲田大學が最適者であることは言ふまでもない。併し大學では自ら之れを私せず、開放して内には教職員俱樂部に宛て、公衆に對しては何人にも縦覽を許してゐる。

私は大隈會館の内部に就て細かに検討するに先ち、大隈記念大講堂に就て先づ語りたい。此の講堂は侯の薨後、侯を永久に記念する爲めに建設したものである。侯の舊宅は大切な記念物ではあるが大衆を容れ得る所でない。この附帯して建設された大講堂こそ、都下に二つとない大會堂で、三千乃至五千名を容るる容積があり、一千名を納るる地下の會堂もある。此堂の建築された場所は大隈侯邸宅の一隅にもと家職の家があつた處で、此の高大の建築は鶴巻町の街道に沿うて其の一面の雄姿を現はし、大隈會館の庭園にも亦其の半面を現はして美觀を添へてゐる。堂の正面右側に聳立してゐる自鳴鐘臺は威容堂々として、其の晝夜打鳴す鐘は四隣に震つて混濁の人心を淨化してゐる。此會堂は内外の文藝に關する會合に利用され、嘗ては今上の御代理として秩父宮殿下を奉迎したこともある。老侯在世の時は卒業式其他記念會等で大衆を會する時は、いつも大テン

トを張り、そこに會するのが例で、老侯もしは、テント内に演説されたが、侯は其都度是非國校の學徒を會する大會場が欲しいと云はれた。然るに侯の生前此會堂の設立を見なかつたのは如何にも遺憾な事だ、切めて一回でも侯を此の堂の講壇に立てて、其の獅子吼を聴きたかつたと毎々感ずることだ。併し此會堂を建てるに就ては校友の殆んど全部が熱心に贊助したのみならず、全國における同志の苟くも敬慕を侯に捧ぐるものは幾うて贊助し、寄附金額は大は五萬圓より小は十錢にまで及び、國民的助力が此大殿堂を結成したことを考へると、侯も恐らく地下に微笑を洩らして居らるるであらうと思ふ。

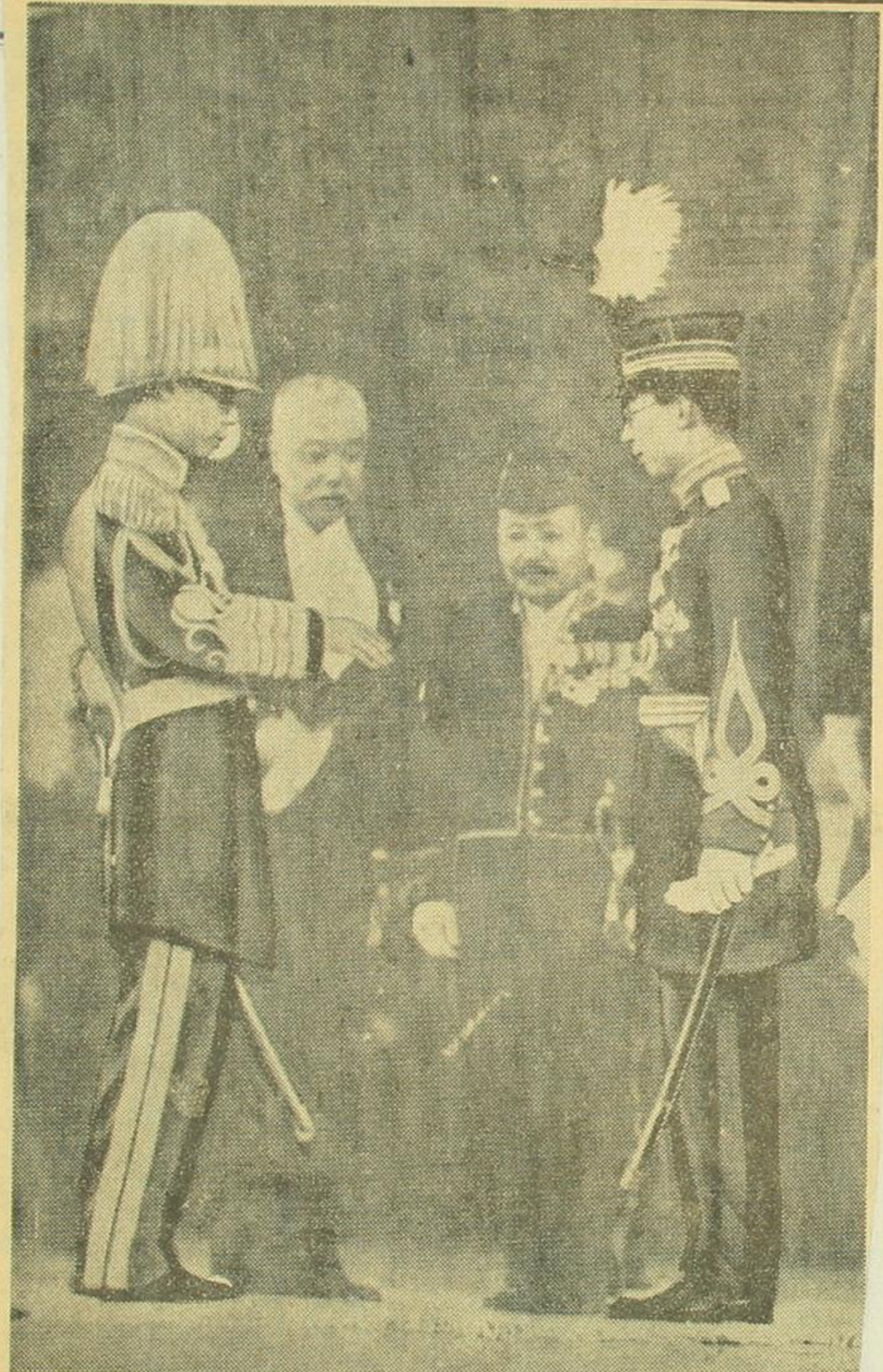
私は逆轉して大隈會館の内部を検討せんとするに當り、先づ會館の門を通りかかつて思ひ出すのは、此門が會堂の出來た爲め元の位置を變じ、今はハスカヘになつてゐることである。扱て左關に入つて何人も見のがし得ないのは大なる二王尊像が左右に立つてゐることである。これはもと岡田縣の某寺にあつたもので、作者は不明だが丈餘の桶の一本彫りで、靈妙な鑿の冴えは決して凡作でない。其の逞しい左右の腕をひろげ巨眼を輝かしてゐる雄姿は如何にも侯にの逞しい立脚番で、往年大隈邸が火災に罹つた時少しの破損もなく此の巨像が救はれたのは、早稲田中學の若い學徒が、其の軟かい手でいたはりながら撤出したからであつた。火後侯は涙ながらに學生達の働きを喜ばれた。

老侯は骨董などを玩ぶ人でなかつたが岡田に於て大なるものを喜ばれた。二王もそれだが、同じ立脚に青銅の毘沙門天が手に正義の劍を掲げ威容を示してゐる。これも丈餘の大像で、某商工會社が米國の博覽會に出品したものが、これも侯の趣味に適つてゐると思ふ。



蘭文

以下
5 丁
白紙



間瞬の手握御的史歴

特浦三にて譯京新日六 帝皇德康左御、下殿宮代名御父秩右御てつ向
送電毎大—便行飛社本リよ京新 (寫謹員派)

右牧野清の
澤本
津浦
...

終焉... の蔵たる長岡
軍師長官全部は米澤藩主上杉輝
正大卿に御禮付といふ東軍總督府
の官軍から上杉公に對する「御
沙汰公示証」?といふのがそれで
往時の香りもしのびやかに見らる
のも感懐を深からしむるものだ

史書にも 載らぬ 貴重な文書發見さる
但兵隊之外婦女子下々之分へ取
録美濃長岡民政局へ一相渡候
十月
この書前の開頭右とあるは本証
の外に兵部を記した目録のあつた
ことが察せられつく味讀する
内にも戊辰の戦雲うづく感歴四年
碧血を故城の荒草にそゞり児城を
遊遊して長岡武士の
意氣... を見せたことや
岩代藩(薩摩藩)の奥村禮澤の草
家に敗戦の哀を啼く此の音を社に
逝いた快徳長岡藩地蔵河井龍之助
の悲壯な終焉情景、宛野原と化し
た長岡その他長岡をめぐる壯烈な
戦史や内面の悲話哀話の数々が幻
の如く手繰得られる長岡戊辰戦史
の重要文獻である、この証書は當
時東軍總督府軍務官から出たもの
である

書風... は所謂御家流と
も云ふべきもので當時の書面
あることは確かだと想像します
當時米澤に留まつてゐた總督府
に長岡側から差出した其時の届
出人数は牧野駿河守、雪堂(隱
居)、祖母(駿河守、奥方(同)
第十(同)姉子二人都合七人、各
近習初め諸役士外七十八人、足輕
六百餘人、備前隊百人位、器械所
所人七十八人位、家中以下家六百

人位、計千五百七十餘人とあり
この中の兵員が米澤公にお預け
になつたもので死に角珍しい古
文書です



中島謙吉様

昭和9年5月31日

拜啓愈々御清穆之段奉賀候陳者御著述之書籍賣上部數ニ對スル御原稿料下記ノ通り差出申候間御查收被成度候

| 書名 | 計算年月 | 賣上部數 | 定價 | 定價合計 | 印稅合 | 印稅合計 |
|---------|-----------------|------|-----|------|-----|-------|
| 解の池 | 自89年3月 至9年3月 | 0 | | | | |
| 一言一行 | 自9年3月 至9年3月 | 2 | 230 | 460 | 12 | 552 |
| 藝苑-338上 | 自9年3月 至9年3月 | 33 | 230 | 7590 | " | 7108 |
| 下 | 自9年3月 至9年3月 | 3 | 230 | 690 | " | 828 |
| 賴山陽 | 自9年3月 至9年3月 | 11 | 300 | 3300 | " | 396 |
| 春城隨筆 | 自9年3月 至9年3月 | 26 | 280 | 7280 | " | 8736 |
| 六種 | 自9年3月 至9年3月 | 20 | 280 | 5600 | " | 672 |
| 筆語 | 自9年3月 至9年3月 | 39 | 250 | 9750 | " | 1170 |
| 漫筆 | 自9年3月 至9年3月 | 36 | 250 | 9000 | " | 1080 |
| | 自9年3月 至9年3月 | | | | | |
| | 自9年3月 至9年3月 | | | | | |
| | 自9年3月 至9年3月 | | | | | |
| | 自9年3月 至9年3月 | | | | | |
| | 自9年3月 至9年3月 | | | | | |
| 合計 | | | | | | 75241 |

備

考

印稅計算月 自十月至三月 賣上ニ對シテハ五月ニ支拂 自四月至九月 賣上ニ對シテハ十一月支拂

追テ初版又ハ大訂正ノ場合ニ限リ壹百部ヲ新聞社雜誌社 其他ニ賣弘メノ爲メ贈呈用トシテ製本高ノ中ヨリ差引キ計算候ニ付 右御了承願上候

早稻田大學出版部

新聞檢討

發行部數と廣告料

M・C・C

「新聞の配達なんかは何時か解消する時機が来て、スタンド賣りの時代が近...

「新聞の最低廣告單價は一萬部當り一厘二毛でなくては經營は至難である...

法で調べるか問題である、アメリカの如くA・B・Cの機關のある邦は別として、吾が邦の如く千の紙が殖えて...

したら、その人は新聞廣告宣傳を中止した方が幸福である、その原因として...

一、毎夕新聞は夕刊にして、時事新報は朝夕刊たること

一、毎夕新聞と、時事新報との設備機構に於て雲泥の差あること

一、毎夕新聞一部は購読料の支拂者その者及び多くも二人に限つて...

一、毎夕新聞と、時事新報と紙面に於ける品位、記事の正確、記事の豊富の相違

社會的聲望の相違

毎夕と時事新報とを比較することが既に無謀ではあるけれども、以上は單...

二

然らば何んな新聞が發行部數の他にハンデキヤップを附加されてゐるか、先づ東京に於ては時事新報、都新聞、...

十錢のものならば、讀賣新聞は七十錢乃至は八十錢であるべき筈にも拘らず...

都下の待合、藝妓、料理屋、貸座敷業者中九割或ひは、九割五歩は殆んど都新聞の讀者であると言つて宜い、甚しいのは...

北紙中有力とされてゐるものに

秋田魁新報、東奥日報、福島民報、山形新聞、岩手日報

等があるが、鎧袖一觸で、遠く及ばない
廣告主は其點を購つて、發行部數以外の
の廣告料金を支拂つてゐる、殖民地新
聞と同様だ。

以上に反して、發行部數以下に廣告
料を廉く購れてゐる新聞もある、讀賣
新聞を筆頭として、小樽新聞、名古屋
新聞、中國新聞、等は皆此類である、
讀賣新聞は最近數回の廣告料値上を發
表した、けれども現在の發行部數を以
つてしてはまだ、遙かに低廉である
と、言ふ理由は、

一、併讀紙たること

一、現在の發行部數が案外多くて、

その維持に苦心してゐる。然し
今日値上げを承認すれば、紙數の
減じた場合も、値下げを許すまい
事實、讀賣新聞は、紙面も刷新され
たには違ひないが、伸展の原動力が、

北米野球團の招聘或ひは三原山の探査
等、きわむの的催しに對し、幸ひにも

大當りを占めたにあることは新聞の素
人筋さへも認むる所である、從つて讀
者の維持力が疑問であるといふ、不安
の念を廣告主に抱かれてゐることが主
たる原因である。然して讀賣が併讀紙
であるといふことも、廣告料の廉い原
因を爲してゐる、尤もこれらの困難に
どん／＼打ち勝つて行つては居るが、

地方新聞に於ける、名古屋新聞は、
百萬都市の名古屋に發行所を有し、濶
たる紙面を有し、急激なる發展をし乍ら
廣告料の廉い原因は對抗紙たる新愛知
の「老舗」たる、又一つには地方版傳
統に打ち負かされてゐるためである併
し今日の實勢力は、やがての日の待望
すること必ずしも不可能ではない。小
樽新聞も又同様北海タイムス無かりせ
ばである。中國新聞は、購買力の強力
なる廣島の土地を控え、發行部數に反
比例して廣告料の廉いことは消極的な

るがためである、それは恰も河北新報
の場合と相反してゐる。河北新報が前
社長一力健次郎翁時代、——儲ける前
に先づ費ひ——をモットーとして、宣
傳に、廣告主サーピスに莫大なる費用
を投じたが、然しその收獲は一力翁亡
き今日それに幾倍して實績を擧げてゐ
る。それに對し、中國新聞は——儲け
る前に先づ出費を省け——を標語とし
た、ために、當然伸ぶべき新聞が未だに
伸びて居ないのは遺憾至極である。

三

次に發行部數である、先きにも述べ
たやうに、A・B・Cの機關がない日本
に於ては、新聞の發行部數を適確に擧
げることが容易の業ではない、が、然
し廣告主のにらみなるものは大體に於
て大同小異である、と、言ふのは常に
廣告主は、商品の購買力に主力を集注
してゐるからである。

先づ新聞王國たる大朝、東朝、大毎
東日の兩社を視る、大朝と大毎とは、

怖れたがためである。

と豪語して居たが、當時幾分大朝、
東朝共に讀者の減じたことは事實であ
る。けれども今日に於ては、大毎より
も大朝の多いことは確實である。人は
是を大毎一〇・二七事件と結びつけて
ゐるが、左様な問題は枝葉のことであ
つて、大毎が七海販賣部長の積極政策
を放棄して、鹿倉販賣部長の消極政策
を採つたに原因してゐる。

販賣の積極政策といふことは、廣告
料値上前後の如き場合は必要缺くべか
らざることではあるが常時に於ては可
成り考究を要する問題である、何ん
なれば積極政策の半面には擴張費の増
額と紙代の滞納を考へなければならな
い、採算を度外視しての積極政策は寧
ろ消極政策に如かずといふ結論に達す
る、以上の如く大朝は大毎の上位を占
むるが、帝都に於ては東朝は、到底東
日の敵ではない、是を要するに大朝よ
り大毎を除いたる數字と、東日より東

發行部數に於て爾來一高一低、勝負常
ならず、時機又は催しもの等に依つて
勝負が一定して居ない、最近大朝が、
大毎を抜いた主なる原因は訪歐飛行の
成功に在る。

當然帝國政府が主催すべきことを朝
日新聞が舉行し、而もそれが成功裡に
完結したのであるから、讀者が俄かに
増加したことは、當然考へらるゝこと
である、その後大阪朝日新聞は日本新
聞街の王座を維持すること久しかつた
が、たま／＼ミリタリズムの擡頭する
折柄大朝の編輯局長高原操氏(現主筆)
等は、尾崎行雄氏等と組んで、軍備縮
少、不戦論を盛んにプロパガンダした
るがために、圖らずも軍部の反感を
購ひ、遂に——在郷軍人の不買同盟
——に達着するに至つた、自由主義
の旗幟を中の島に翻す大阪朝日新聞と
しては、軍備縮少も不戦論も當然のこ
とでもあり、或ひは果敢のこととも稱
すべきである。この事は獨り大阪朝日

朝を差引いた数字は相等しいと視て大差はあるまい。所で

大阪朝日新聞 百二十五萬以上百三十三萬
大阪毎日新聞 百十五萬以上百二十萬
東京日日新聞 七十三萬以上七十八萬
東京朝日新聞 六十三萬以上六十八萬

となり、大朝、東朝及び大毎、東日の各合計発行部数は、百八十八萬以上二百一萬といふ数字になる、とまれ、各兩社の姉妹紙合計部数は二百萬内外を彷徨してゐるものであることはたしかである。

その他の新聞に就て視るに

讀賣新聞(五十一萬以上五十八萬以下)
報知新聞(三十二萬以上三十八萬以下)
時事新報(二十四萬以上二十八萬以下)

新愛知(二十三萬以上二十七萬以下)
福岡日日(十八萬以上二十二萬以下)
名古屋新聞(十三萬以上十六萬以下)
國民新聞(十一萬以上十五萬以下)
北海タイムス(十萬以上十三萬以下)
東京毎夕新聞(九萬以上十二萬以下)
都新聞(七萬以上十萬以下)
中國新聞(七萬以上十萬以下)
小樽新聞(六萬以上八萬以下)
大體以上の如き発行部数とにらむことが出来る。

四

次に廣告料單價である、單價を算定する前に先づ四月に於ける、東西四新聞の廣告行數を示すと左の如し

東京日日新聞
普通物 五六一、五九四行
案内 九四、九一五行
合計 六五六、五〇九行
東京朝日新聞
普通物 五五三、三九八行
案内 一〇〇、七一五行

代未開の赤字をもつて宣傳をした。

けれども爰に案内廣告とは何んぞやといふ疑問が生じて来る、

「雇人」「求職」「土地家屋」「貸借間」等々ならば問題はないとしても、「カフエー」々々と三行欄を十小間も二十小間も使用したものを稱して「案内廣告」と稱し得べきや——といふ疑問が生じて来る。

慣例として、案内廣告は、普通廣告よりも料金が低廉である、その關係上廣告外交の口一つで普通廣告も、案内廣告に誘はれる、爰に行數戰の弊害が伴ひ、新聞社は自ら廣告料の値下げを敢て爲すといふ滑稽を演ずることになる。

さて東西四社の廣告料收入より視たる單價であるが、東日の平均單價七十八錢と視る時は四月の行數六五六、五〇九行に對し五十萬三千七百となり(七十七錢の場合) 四九六、五一二圓(七十六錢の場合) 四八九、九四六圓

(七十五錢の場合) 四八三、三八一圓

となる勘定であるが、七十六錢以上七十八錢以下と視て大差はあるまい、然して東朝は平均行數七十三錢と算定する時は、四月の行數六五四、一一三行に對し四十七萬八千五百二圓にして

(七十二錢の場合) 四七一、九六一圓

(七十一錢の場合) 四六五、四二〇圓

(七十錢の場合) 四六八、九七九圓

となる勘定であるが七十二錢以上七十三錢と視て大差あるまい。

翻つて大阪朝日の行數一圓五錢と視る時は、四月の行數五九、九〇一七行に對し、その廣告料收入は六十二萬八千九百六十七圓を算し

(二圓四錢の場合) 六二二、九七七圓

(二圓三錢の場合) 六一六、九八七圓

(二圓二錢の場合) 六一〇、九九七圓

にして、東朝、東日並に是を一圓三錢以上一圓五錢以下と視ることが出来る

一方大毎は、大朝より三錢廉の行一圓二錢として、四月の總行數五八一、

合計 六五四、一一三行

大阪朝日新聞

合計 五八一、〇〇三行

といふ數字を示し、東日が制覇してゐる、從來廣告の行數は大阪二大新聞が王座を占め來つたが、昨年來東日が凌駕し、爾來今日に及んでゐる、案内廣告に於ても斷然東日が優勝を示し來つたが、四月に及んで俄然東朝が東日を破るに至つた、東日に對して連戰連敗の苦盃を嘗めた東朝は、四月に於て漸く仇敵東日を破つた。案内十萬行を突破し、案内廣告界に於ける日本の最高記録を獲得するに至り、尙且つ六十五萬四千百十三行の總行數を獲得し、今時の行數は實に同社創業以來の最高記録を示したので石井營業局長は四月三十日午後六時より矢の倉福井樓に全廣告部員を招待して盛大な慰勞の宴を張つた。東朝は手の舞ひ、足の踏むところさへも忘れて狂喜した、斯くて東朝は此の旨を案内廣告欄中央に前

〇〇三行に對する時は五十九萬二千六百二十三圓となり

(二圓一錢の場合) 五八六、八一三圓

(一圓の場合) 五八一、〇〇三圓

(九十九錢の場合) 五七五、一九〇圓

となり、此の平均單價は一圓以上一圓二錢と視ることが出来る。

斯くて兩社最低廣告收入を合する時は

大朝 六一〇、九九七圓

東朝 四五八、九七九圓

合計 一、〇六九、九七六圓

大毎 五七五、一九〇圓

東日 四八三、三八一圓

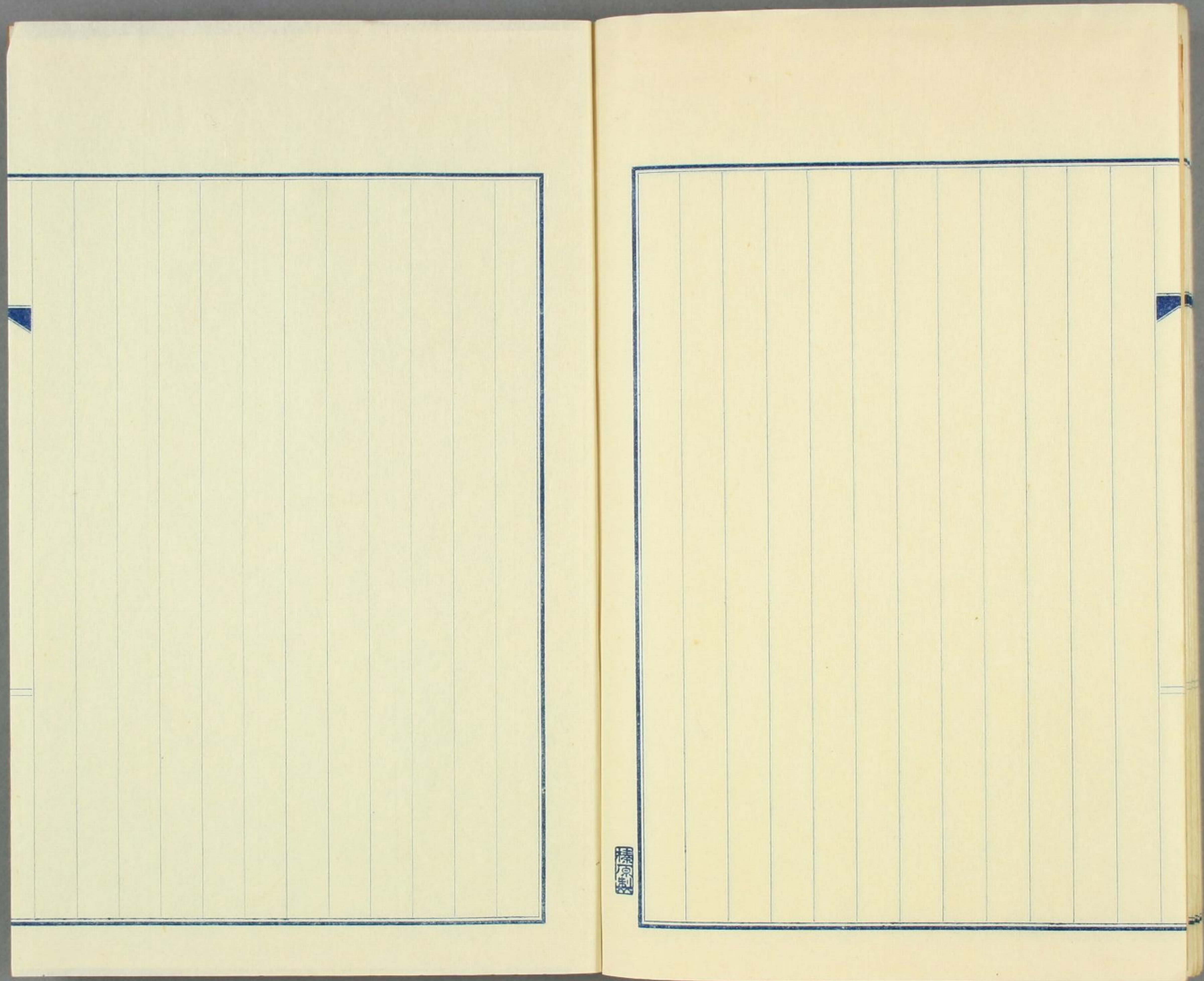
合計 一、〇五八、五七一圓

といふ數字を示し、兩社各一ヶ月百萬圓を下らず一ヶ年一千三百萬圓に近い廣告料收入を擧げてゐる、然して以下

報知、時事、讀賣は十三萬圓以上十六萬圓止りである。



標原製



蘭
文
書
房



昭覽室

昭覽室

